
それは誰かの足跡

八代ゆかな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それは誰かの足跡

【Nコード】

N5018F

【作者名】

八代ゆかな

【あらすじ】

人や物、自然について思ったことや感じたこと、ある何かについてふと思いついたことを文に綴ってみました。

支えあい

月と太陽。

それはこの世を分ける二つの光。

昼と夜：それは太陽と月がいる世界。

お互いが譲り合って、領地　治める時を分けた。

だから、相手の時間の間は姿を隠して目立たないようにする。

それは絶対の掟。

誰もが知る世界の決まり。

暗黙のやり取り。

昼に生きる太陽と夜に生きる月はお互いを認め合って、ちゃんと理解しあって支えあってともに長い時を重ねてきた。

決して同じ時を生きることはないけれど、その分同じように長い時を積み重ねて出来るだけ近づきたいと希った。

その願いが叶わぬものだとしても良いのだと、叶ってはならぬと、胸の内で小さく呟きながら。

それでも願わずにはいられないのだ。

二つの光は永久に近くある。

他の生命はたやすく枯れてしまう。

だからこそ、月と太陽をお互いを容認し、大事だと思いあつ。

時は不滅に流れゆく。

永遠に等しき生命を授かった数少ない同士だから。

そこに居て。

いつ終わるやら判らぬ生命をひとりで生きるのは寂しいから。

だから。

この関係を保つためになら、

太陽が地上を照らすときは月は蔭に控え、月が地上を照らすときは太陽は蔭に身を投じる。

全てはお互いのために。

一秒前と一秒後

未来。

それはいつか必ずやってくるもの。

一秒先だってそれは確かな未来の世界。

いつか途切れるそれは人が悲しみに暮れても、絶望に満ちても絶対にやってくる。

約束された時をリセットしにやってくる。

何かが始まるのも、終わりが来るのも全て未来があるから。

過去と未来は繋がれているから人は生きている。

振り返る思い出をくれる。

生きた証をくれる。

誰しも持っている可能性が生きる世界。

何も視えなくても判らなくても、手探りであっても進もうとすれば切り開ける。

そこに必ずあるものが未来。

目に映らなくとも、触ることが出来なくとも、その肌でふとしたき

っかけでとても身近に感じられる。

ほら、そこにあるでしょ？

感じるでしょ、人を伝って。

空気を伝って、風を伝って…。

感じようと思えばいつだってそれは感じられるんだよ。

すぐ側でいつも控えている。

時を紡いずっと永久にあり続ける。

たとえ人が世界から消えて、何も無くなったとしても時が流れる限り未来は無限大の可能性を秘めて、はじめるときを静かに待っている。

たとえ僕がこの世界から消えてしまっても世界に、人々に明日未来が来るように。

永遠に終わらないそれは無限の可能性。

過去。

それは何のためにあるの？

人が生きるうえで常に付きまとうもの。

それが過去。

一秒前だってそれは確かな過去になっている。

可笑しいよね。

全然実感無いのに、それは確かに過去として世界に刻まれているんだ。

流れた時間だから、もう二度と戻ってはこないんだ。

取り戻せないんだ、どんなに悔やんでも。

どんなに欲しても。

もし一秒前に死んだ人がいるとしよう。

その人は一秒前まで確かに生きていて、自我を持って動ける体を所有していた。

だけど、一秒後にはもうそこには居ないんだ。

どこかへ消えちゃってる。

取り戻せないんだ。

終わってしまったことだから。

たった一秒だって命取りなんだよ。

一秒前までは生きていた。

一秒後には死んでいた。

それってほんの少しの違いで世界が変わったってことなんだ。

そう思うと怖いな。

人は未来を知ることが出来ない。

だから、過去に起きたことを嫌なことを一秒先の未来で悔やむ。

過去を一度も悔やまなかった人なんて居ないはずだ。

きっと、一度は悔やんです。

あの時ああしておけばよかったとか、あの時こうしていれば…とか、

あるはずだ。

それが人を苦しめていく。

では、過去は人を苛むものなのか？

それは少し違うと思う。

過去は確かに取り返しがつかないから、くよくよとそのことを引きずって人を立ち直れなくさせるかもしれない。

だけど、それらを乗り越えれば人は強くなれるんだ。

また一つ成長するんだ。

嫌なことであればあるほど、辛いことであればあるほど、忘れずに応用していくんだ。

もう二度と同じことを繰り返さないためにとか、そういうことは少々無理があるよね。

たとえば人の死。

人の死はどうしたって必ず来る。

それは生きている中で、何度か経験することだろう。

止めることはできないだろう、繰り返さないなんて事は出来ないだろう。

だけど、応用は出来るよね。

同じ過ちを犯したくないなら、ちゃんと出来ることをしよう。

したいことをその人が居るうちに、居てくれるうちに止められない死だと判ったのなら、思い残さずやりたいことを徹底的にやる。

未練なんて残らないくらい…。

一秒先だって何が起こるかわからないんだ。

取り戻せなくなっただって、悔やまなくらい楽しい思い出を作っておけば良いんだ。

悔やまないように過去を応用して生きればいいんだ。

それが過去が在る理由の全てだとは言わないけれど、少なくとも僕は悔やむ度に応用して上手に生きたいんだ。

過去にあるのは辛い思い出ばかりじゃない。

楽しい思い出って上手に応用すれば、未来にプラスされるかもしれない。

楽しい思い出って人を強くする。

不安なとき、振り返れば安心させてくれる。

寂しいとき、思い出せば心を暖かくしてくれるでしょ。

楽しい 明るい思い出は人の不の部分を取り除いて、たとえばそれが一時的なものだとしても勇気を与えてくれる。

それが過去。

結局のところ、過去は人の成長を促す風のようなもの…なのかもしれない。

毎日の積み重ねが僕等を大きくする。

感じるもの

夢。

形のないもの。

触^{さわ}れないもの。

でも、確かにそこにあるもの。

それが僕の夢。

憶えてる夢と憶えてない夢。

必要のあるものと必要のないものみたいに割り切られる。

一歩進んで手に入れた。

もう一歩進んだら、はじけて消えた。

まるでシャボン玉。

大きな穴へ落ちた。

そこは夢のゴミ箱。

忘れ去られた夢たちが眠る場所。

そっと閉じられた引き出しみたいに普段は触れないところ。

良い夢も悪い夢も…ありがとう。

小さな一歩を僕にくれた。

勇気をくれた。

背を押して、『行っておいで』と明日を生きるのを応援してくれる気がする。

それは一日が終わって、また次の一日を生きるために用意されている試練のような気がする。

どうして夢を見たのかわからないけれど。

どうして夢を見るのかわからないけれど。

夢は過去から未来への架け橋。

優しさはとても嬉しくて、とても悲しい。

優しさはとても心地良くて、とてもいや。

痛くて、苦しくて……けれど、優しくしてもらうつと安心して心が泣きそうになる。

温かくて、同じように僕も誰かに優しくしたい気持ちになる。

それはとても良いこと。

きっと僕に優しくしてくれた人も、誰かに優しくされたんだ。

そうして受け継がれていく優しい気持ちはとてもいいと思う。

お父さんとお母さん

『朝。』

目もくらむほどに明るい朝は嫌いじゃない。

けど、好きでもない。

夢から現実へと起こしにやってくる光りはとても嫌い。

まだ眠いんだよ…。

言い訳なんて全然聞いてくれないで、毎朝毎朝凝りもせず眩しい光りで僕を照らしにやってくる。

時計の針が正午を刻む頃には色が濃くなって、なんか老けたみたいになる。

ねえ、歳とったかい？

…けれど、きつとまた次の日にはまた若返ってるんだろうなあ。

そう思うと、なんだか少し…げっそりとした気分になる。

そう思うのって僕だけなのかな？

ああ…そうだ。

このときはもう朝って言わないな…。

『昼。』

老けたから名前が変わったんだな、きつと。

ほら。

太陽も朝より上に上がってる。

老けたんだね…。

朝が老けると昼になる。

昼が老けると夕方になる。

夕方の空は赤く染まって好き。

小さい頃は悲しい気分させられて嫌いだったけど、今はとても気に入ってる。

オレンジのかかった夕暮れはとても綺麗。

橙色から藍色に変わる瞬間も好き。

お父さんが眠って、お母さんにバトンタッチする瞬間。

お父さんである朝が老けた昼が更に老けて夕暮れになると、知的美人な『夜』であるお母さんが活躍する。

また明日の朝も起こしに来るんだろうなあ…若いお父さんの朝が。

『夜。』

夜は好きだ。

どんな時もいつもひんやりと冷めていて、とてもクールだ。

暗闇に住んでいるところが好き。

鳶色のカーテンで素顔を隠しているところが好き。

月を目立たせて脇役に納まってるところが好き。

……夜ってかなり照れ屋だ。

僕達を眠りに誘う歌を聞かせてくれる。

優しい子守唄はどこからか静かに聴こえてきて、気付けば包まれて眠ってる。

ずっと見守っていてくれる黒い存在は誰もが知っている自然のお母さん。

『朝』がお父さんなら『夜』はお母さん。

対だけど、二つは一つのカラダに住んでいる。

『空』という神様の中に生きている。

全てを覆いつくしてくれる闇。

その瞬間だけ自分が判らなくなるけれど、僕はその時間が好き。

色々考えさせてくれる空間だから。

元気で明るい『朝』と落ち着いてクールな『夜』。

ひんやりと身にまとわり付いてくる空気は、その日のことを振り返って反省させる不思議な力がある。

そんなところまでお母さん。

黒い色を好んで明るみには絶対に出てこないけれど、我が子を見つめるときの眼は、心はいつも温かい。

夜は好きだ。

世界を黒く自分色に染めるけど、僕を安心させてくれる。

明日も頑張ろうって思える。

月みたいに目立つことはしてないけれど、とても落ち着いていて羨ましくなる。

まだまだ小さいなーって悔しくなるときだってあるけれど、まだまだ時間はあるからと思える。

『朝』が明るいお父さんなら、『夜』はクールなお母さん。

縛るもの

『言葉。』

それは時に人を傷付ける刃物。

それは時に人を強くする魔法。

どちらにしろ、人に多少の影響を与えるもの。

人が人と繋がっている為に駆使する道具、手段。

人の心を縛るのに一番適している視えぬ糸。

貴方はそれを意識して言葉という鎖を使ったことがありますか？

意識して使う人は、意識して使った人はきっと少ないんだと思う。

無意識が知っていながらにして、なんとなくこうなると解っているがらにして、けど、それを認識していない意識が使う……ことならあるかもしれない。

だけど、きっと人はそれが他人を縛り付けるものとして放つことはないのだと思う。

きわめて稀、だ。

言葉は己との駆け引きだ。

よく考えて使わないと泣きを見ることになる。

言葉は他人との駆け引きだ。

よく考えて言葉の選択をしないと痛い目を見ることになる。

いわば細い綱をつま先で渡っている状態だ。

バランスを崩せば転落。

調和出来なければ真っ暗だ。

言葉は心を蝕む。

言葉は己を成立させる。

言葉は世界を振動させる。

言葉は弱き人がいつも装備している武器だ。

人を生かす事もできる最高の。

人が知らない人だけの能力。

それが『言葉』。

ある人は言った。

約束はどうして交わされるのかと問うた僕に言った。

『約束は守るためにあるのですか？』

『約束は破るためにするのですか？』

『約束は人を悲しくさせるために交わすのですか？』

『約束は人を待たすためにするものなのですか？』

『約束は人を喜ばせるために与えるものですか？』

尽きなかった僕の質問をある人は難なく答えた。

約束は心を通わした者同士が交わす契りのこと、だと。

それは裏切ることを好としない…と。

だから、約束は交わすものではないと。

心がひどく痛むから…　　とも言った。

『では、約束は人を生かすものではないのですか？殺すものなのですか？』

すると、ある人は困ったふうに笑った。

『約束は人を縛るためにあるのさ』

そう言った人も約束に縛られていた。

言葉と言う音に乘せられて交わした約束に　　。

いつか僕も約束を交わしたのなら、あんなふうに苦しむことになるのだろうか。

…それも一興かも知れないな。

ここにバカがひとり

息を吸って息を吸って、吐いた。

また一つ息を吸っては吐いた。

大きく吸って、小さく吐いた。

準備はいい？

さあ、位置について。

用意！

それで、それから、何を、どうするんだい？

今更に首を傾げてしまった。

だって、何をするつもりだったのか、忘れてしまったから。

仕方ないじゃないか。

思い出そうとしても思い出せないんだから。

ここにバカがひとり。

世界に取り残されたバカがひとり。

出遅れたんだ。

バカだったから。

緊張して緊張して。

心臓がバクバクしてたんだ。

だから、それを少しでもほぐそうと深呼吸を何度も繰り返してたんだ。

これ以上緊張してカチカチになってしまわないようにただそれだけに意識を集中させていたら、そしたら……忘れてしまっていたんだ。

何をするつもりだったのか。

なんでそんなにカチカチになっていたのかが、分からなくなってしまうたんだ。

ぽつかりと穴を開けて緊張が記憶が消去してしまったようだ。

息を吸って吐いて。

それから？

やっぱりここは、位置についてよーい……ドン？

それとも、準備運動？

ここに首を傾げたバカがひとり。

いつまでそうしてるのか。

いつからそうしていたのかさえもう思い出せない。

だから、いつまでもそうしているのか…。

世界に忘れられたバカ。

だって、一つのことにと頭をとられると、これから何をするのかさえ覚えてられなくなるような奴だったから戦力外だって置いてかれたんだ。

ひどい話だと思わない？

…え？

僕の頭がひどいつてかい？

……世界が賢すぎただけだよ。

そして、また息を吸って大きく吐き出したんだ。

思い出すのに頭を使いすぎて疲れちゃったから息抜きにそうしたんだ。

だけど、あれ…。

何をしてたんだっけ？

何に頭を使つて僕は疲れたんだろうね。

そうしてまた僕は息を吸つて吐き出すんだ。

そして、また何を考えていたのか忘れてしまつんだ。

平等がない理由

人は誰しも皆平等。

そんなこと、一体誰が言い出したんだろう。

平等って何だ？

皆等しく差別のないことを言うのか？

この世に平等なんてないんだよ。

だって、生まれてくるのですらその姿に等しさなんて必ず与えられてない。

身体機能の低さとか、色々問題をかかえて生まれてくる者もいれば、無事に生まれてくる者がいるように。

平等なんて、この世に誕生した無知なときからでもないじゃないか。

だから、きつと…ああ。

そうだ。

全てを持った人を羨んだ人がそんなことを言い出したんだ。

『人は誰しも平等である…はずだ』と。

それはとても心惹かれる言葉だけれど。

…でもね、やっぱりこの世にそんな平等なんて、存在しないんだよ。

人は他人より特別でいたいはずだから。

その心が消えない限り、この世に平等は誕生しない。

「あー！お前、何自分のだけ多く取ってんだよ。ずるいぞっ」

「ふっ。そんなこと、俺の知ったことか。あえて言うなら、俺ひとりに夕飯の準備させたお前が悪いんだ」

「平等に分けるべきだろお、ここはあ」

「ちがうだろお。ここは俺が仕切ってたんだからお前は従うべきな

のさ」

「不公平だあ。不平等だあ」

「バーカ、何言つてんだよ。この世においてなあ、何もかも全て同じく、等しく、差別なくなることあるわけないだろお。だから、今回のおかずことにしても多少の差が出たんだって。そだけだつてば」

「ちーがーうう……。お前が特別に自分のを多く盛つたんだろお。絶対そうだって！お前はそんな奴だって！」

「お前だつてそうだろうが！もし同じ立場に立つたら自分のだけ多く盛るだろ？…はあ…言っちゃった。…まあ、でも、人つてのは大体そんなもんなんだよ。自分は特別なんだよ。つーか、そんなことする奴だつて知ってる上で俺に夕飯の支度を押し付けたのはお前だぞ。文句なんか言つな、アホ」

「うう…」

これが現実です。

ね？

平等なんて、ないでしょ？

だって、それ、俺の好物だもん。

そんなときに夕飯の支度任されたりしたら、つい人のより多く盛っちゃうよね？

だから、自分は特別　という心がなくならない限り、この世に平等はこないのでした。

…というか、それが無くなったら人は人って言えるのかな？

侵食

夢中で夢中で、だから見失ったんだ。

だからこそ分からなくなってしまったんだ。

必死で必死で、だから気付かなかったんだ。

だからこそ応えてあげられなかったんだ。

だから間違ってしまったんだ。

息のする場所を。

息が出来る場所を求めて。

安寧を求めて。

平和を求めて。

この足は駆け出した。

脇目もふらずに。

ただひたすら走り続けた。

追いかけた。

がむしゃらに毎日。

どこにあるのかも知らないものをずるずると。

あるのだと信じて。

走り続ければきつと見つけられるものだと思い込んで。

なりふり構わずにただ足を動かし続けた。

肩で息をして、聞こえてくる音に怯えながら。

迫ってくる闇の日から逃れようと、精一杯空気を吸い込んで前だけを見据えて走った。

平和を。

安寧を。

優しさで満ち溢れた幸せな日々を取り戻したくて。

ただそのためだけに。

何物にも変え難い光のためだけに息を切らして痛む足を叱咤しながらも走り続けた。

その先に必ず安らぎがあるのだと信じて。

追って来る騒々しい足音を振り切って。

聞こえてくる悲鳴を無視して。

泣き叫ぶ声に耳を塞いで。

そうしているうちに夜が明けて、明るい世界が広がってくれるのだとひたすらに信じて。

暗黒の世に吞まれない様に一生懸命踏みとどまって。

侵略されて赤色に染まる同士たち。

そんなふうにはなりたくなかった。

壊された思い出を抱えて。

昔を見つめて居たかった。

一体どこの誰が何のために始めたゲームなのか知らないけれど、もううんざりだ。

どうせこれも単なる気まぐれから始めただけのお遊びの一種なのだろう？

これ以上巻き込まないでくれ。

息が出来なくなる。

けれど、立ち止まってはられない。

走り出す。

息がもつと苦しくなるけれど、このままここで息絶えるよりも。

少し苦しさが増すだけなら、息の出来る場所を探すほうが建設的だろう。

だから走る。

ただひたすらに。

道を見失ったふりをしながら。

何にも気付かないふりをしながら。

耳を塞いで。

息を潜ませて。

少々苦しくなっても立ち止まったりはしない。

あの苦しさに比べたらこれくらい、どうってことないと思えるから。

けれど。

本当は来る時のままにこの身を預けて流されたいとも思っただ。

そのほうがきつとずっと楽だろうから。

そう思っけれど、それでも後ろを振り返って闇に吞まれるのを好まないのはひとえに。

全てを諦めたくないからだ。

だから、今日も走り続ける。

目がかすんで足元がふらついても。

走る続けるんだ。

きつとあるだろう静かな優しい時がある場所を目指して。

今はひたすらにただどこか分からない道を全速力で息を乱しながら。

一人でも行くんだ。

周りにはもう赤い色。

赤に支配された哀しい世界に取り込まれてしまっているから。

帰るところはもうどこにもない。

だからこそ、ひたすら前だけを見て。

信じたものを追い求めてゆく。

蒼い水面

雨の中、何も考えずに走り出した。

当てもなく行き先もなく、この世の時間全てを止めてしまいたかった。

蒼い水面の中、沈む舟。

見つめては助けようと身を乗り出す。

けれど、ああ…だめだと身を翻すのは壊したくない絵がそこにあるから。

ほら、ねえ…綺麗だと思わない？

それとも不謹慎だと蔑む？

濡らしてく天の恵みの音が。

この肉体を、世界を。

優しく包み込んで。

蝕んで……。

そつゆつくりと…ゆるゆると。

雨の中、勢いよく地を蹴っていた足はやがてゆっくりと地を蹴り始める。

目指すは何処だ？

帰る場所は何処だ？

迷子になった幼子のように辺りを見渡しては立ち尽くし、そして

空をゆっくりと仰ぐ。

今だけどうかこの醜い心を…隠してください。

蒼い水面の中、溶け込む色が美しくて

思わず足を踏み入れた。

未知の世界へ。

一步一步…確実に飲み込まれている。

それを自覚しながらも、ああ…いい。

誰も気づかないだろうよ。

あてもなく動く足が辿りついた世界には温度はなく、ただ在ることを赦されているのは水の色だけ。

状況に応じて身にまとう色彩を変えることの可能な水面のそれだけ。

ああ…。

沈む舟を見て、綺麗だと思った。

絶妙なコントラストが生み出す束の間の色。

それに彩られた世界は、とても美しい。

ならば、それに飲み込まれる寸前の己も…傍目には美しく映るのだろうか。

あの目を奪われた哀しい色のように…そんな色を生み出せているのだろうか。

魅せられた。

魅せられた。

あの世界に。

追い求めて雨の中、出会った。

何も考えずに真っ白な思考回路の中に浮かび上がった情景。

沈む色。

この世界から別の世界へ移り行くその瞬間こそが、己の居たい場所なのだ。

己の凍った心を溶かす水に。

全てを赦されたかった。

美しいと思っただ瞬間に、己も美しく朽ちれるのならこれ以上幸せなことはない。

己に美しいと思わせたモノと同じように己もまた…美しいと誰かを魅せられるだろうか。

この世界に気付くだろうか。

ならばそこにある色に溶け込みたいと思うだろう。

蒼い水面の中、沈み行く時間たち。

時は止まった。

この水面の中で。

時に応じて変化する世界の一部の色として。

蒼い色へと姿を変えて、そしてまたここへ辿りついた誰かを魅せて惑わすのだ。

新しい色を得て生きるために。

そのイロ

目を閉じるたびに瞼の裏に広がる暗闇。

瞼を開いて様々な色に溢れた世界を眺めているとき、それはどこに隠れているのだと、問い詰めたくなるような濃い…ねっとりとした暗闇。

漆黒が視界の詮索を防ぐ。

これ以上を知る必要はないと、知らずともよいと…干渉されるのを拒んで、目隠しを仕掛ける。

……何をそれほど隠しがっている？

……何にそれほどまでに怯えている？

目隠しをする手をゆっくりと解いて開けた視界に、姿を現す。

醜い心のイロを。

卑しい人のイロを。

誰にも見られたくないのだと、知られたくないのだと。

顔を俯かせて、下ばかりを見て。

その時点でもう駄目じゃないかって、呆れた。

瞼を閉じて見える色。

それが黒なら、それはそれでいいのさ。

別に卑しいものじゃない。

それが普通なのさ。

それが必要なのさ。

瞼を開いているときは、明るい色に満ち溢れすぎていいから……
疲れるんだよって。

だから、瞼の裏に広がるのは……せめて瞼の裏の中だけは黒くていいのさ。

暗くていいのさ。

明るい色ばかり見つめていると目が眩んできて足元さえままならなくなってくるから。

それでいいのさ。

暗闇の中で今自分がどこに立っているのかを確認できたのなら、それで……。

けれど、それも嫌だというのなら……解った。

それ以上は詮索しない。

黙って目隠しをされていてあげるから、ねえ…お願いだからこの
瞼の裏から逃げ出さないでね？

人には静かなイロも欲しいんだから。

騒がしい世界ばかりじゃ、なかなか肩の荷も下ろせないしね。

それが必要だという証に、ちゃんとしたスペースも用意されてる
んだしさ。

白い糸と赤の季節

ヒトトキの幻を抱きしめて。

そうぎゅつと強く抱き寄せて…眠りにつく日々を繰り返している。

いい加減、お別れをしなきゃだめだって…気付いてるんだけど、それでも…。

思い、その想いが重ねられて今になっている。

いつからかだめになった。

どうしてか忘れてしまったけれど。

季節を積み重ねすぎたせいかな…。

ヒトリで立っていられなくなった。

真っ白な糸が私を襲うんだ。

コワイ…。

イロもオトも…私を取り巻く全てが偽りのようで。

目が覚めて、一番に見えるのは赤いイロの季節。

白い糸が入り込めない……けれど、一歩手前まで迫ってきている季節に私は居続けた。

そこが一番…私にとって居心地のよい場所だったから。

下界と切り放された異空間に、私は生きている。

静かに呼吸をして、皺は刻まない、老いを知らぬカラダでひっそりと年を重ねて…歳月を心に刻んで。

じとじとした空が泣きそうに歪んで。

カラカラとした乾いた風がひゅっと吹き込んで。

そして、私の髪をたなびかせ、曇らせる。

ヨドンダ瞳には赤いイロが潜み、息づいた白に徐々に侵食されつつある。

ああ…お願い。

頼むから…私の世界を壊さないでと。

白い糸に縋り付いて泣き崩れた。

ポロポロと瞳から零れ落ちる雫は茶色の地面を白に染めあげていく。

お願いだから…もう私の居場所を奪わないで。

もうここにしかないの。

あの人が居たという証。

消えかかっている記憶が唯一残そうとした…忘れたくないと必死に抵抗しているものがここには眠っているの。

お願いだから…もうこれ以上大切な思い出を消さないで。

白い糸が四肢に絡み付いて自由を赦してくれない。

いつかは手放さなきゃいけないのかもしれないけれど…。

私にはまだ必要なの。

ヒトリじゃ歩いていけないよ。

もう歩けないよ。

コワイものが私を包み込んで、私が私でいられなくなる。

貴方を受けれたのなら、これは消さないでいてくれるというの？

……嘘。

貴方は私を白に染め上げるわ。

自分以外何も宿さないように…白を植えつけて。

次が来るようにと…次を譲れと動けなくして。

そんな世界に私は存在しないの。

意味がないの。

ここじゃなきゃ…。

気を抜くと忘れそうになる。

まだそんなに古い過去じゃないはずなんだけれども。

傷口が開く。

びくびくと…黴菌に過敏に反応しながら。

赤い色が私を包み込んで哀しくさせる。

だけど、それがいいの。

もうそれにしか頼るものがないから…。

白い糸がカラダに巻きついてくる。

ああ…もうこの季節は終わりを迎えるのか。

そして…白い季節が来る。

もう二度と巡ってはこない私の赤の満ちる唯一の季節。

私に赦された優しい思い出が…もう霞んで見えなくなる。

あの人を喪って、この季節まで手放すのは……。

それは即ち。

私の死を告げた。

ゆつくりとカラダから力が抜けていき、やがて赤い色を宿した瞳は白に染まりきる前に閉じきられた。

そつと手繰り寄せた赤い色を抱きしめたまま、終わりのない眠りについた。

赤い色を永遠のものにして…。

女王様

揺れる世界の中で、私は目を覚ました。

温かい粉たちに包まれて眠っていた私を覚醒させて、力強く強引にその人は私を連れ去って。

恐縮する私に。

貴方にはこの席が似合うわ…と。

後ろでごめんなさいね…と。

背中合わせにあつらえられた豪華な椅子に私を座らせて。

嬉しそうに微笑んだ。

そのとろけるような甘い相好に私は魅了されてしまった。

中立ではぶかれて…どこにも休めるところはなく。

けれど、歩き続けることも出来ず。

やっと見つけた…誰にも見つけれないだろうと見当をつけてその身を預けた地下だったけれど。

私はふいに起こされた。

たった一人が私に側にいて欲しいと望んだがために。

望まぬ覚醒を余儀なくされて。

手を引いてこの道を示してくれた人が、あつらえてくれた席に。

息を潜めて気配を殺して…肩身を狭くしながらも、仕方なくその場にあり続けた。

背中合わせで頂点の座に居座り続ける彼女はいつもキラキラと輝いていて。

とても懂れた。

私にはスポットライトなんてもの、当てられることなんて滅多になくて。

それに、当てられるとびくりと体をはねさせていつも彼女の後ろに引っ込んだ。

地味な私と綺麗な彼女。

いくら我が身を疎ましく思おうと、彼女はその手を放さずにいて

くれた。

大丈夫よと…。

可愛いんだからもつと堂々と胸張って笑ってればいいのよって。

そう…いつも抱きしめてくれたけど。

私はやっぱり彼女みたいには笑えない。

彼女はいつもニコニコしていて。

白くてやわらかい肌で。

甘くて…けれど、舐めるとクスリ…と意地悪く笑ってすっぱさを与えてくるカラダで。

人を簡単に虜にさせて、癖にさせる。

……魔性の存在。

ねえ…どうしていつもそんなに堂々とその椅子に座っていられるの？

女王様　　。

私は私らしくあり続けることに…自然なままに、与えられたカラダを受け入れて生きることには自信がもてません。

どうせ同じ裏ならば、彼女の後ろの席に背中合わせでつくよりも。

もっと下の階段の始まりより下の土の中で埋もれていたかった。

きつと…贅沢なことなんでしょうけれども。

ねえ…どうして私をお選びくださったのですか？

彼女には憧れという存在だけでいて欲しかったのに……。

せめてものやりとりを

靡く風に、全てを任せていると。

全てを、うつかりと明け渡してしまいそうになる。

一体、何の誘惑？

心をのつつて、ぼやくとさせたところで、何を植えつけた？

……要らないよ。

そんなものも、なにも。

必要ないでしょ。

空っぽなのにさ。

お前は透明じゃないか。

揺らめく水面を覗き込んで。

お前はそれでも映らないね。

だからさ。

そつと風をその肌で確かに、感じ取るんだ。

軽く瞼を閉じて、澄ました耳で確実にある音を聴き取るんだ。

文章にも心にも写真にも…残せないものを五感で感じて。

そして、仕上げに第六感に刻み付ける。

忘れるなよって。

風よ、お前は何を思う？

寂しいか？

記録に残らないことが。

それとも、それこそどこ吹く風ってか？

心の隙間につけ込んで通り抜けていくお前は、ひとり。

有意義にどこまでも行けるんだろう。

そう…きつと、この世界が滅んだとしてもずっとひとりでもどこまでも吹きつづけるんだ。

風よ、お前は何を思う？

人の気を、気まぐれだと言って高見の見物と洒落込むか？

面白いと笑ってさ…。

靡かせる風は、ゆらゆらりと…有限の時などに縛られず、無限の世界をひとり巡るのだろう。

何を思つでもなく…。

それでも、もし全てを明け渡すというのならお前はきっと連れて行ってくれるのだ。

どこまでも共に在ろうと。

全てを託して身を任せるのならそれもありだと。

退屈しのぎにはなるだろう。

一箇所に留まればしないから誰もついてこないのだ。

そんなふうには苦笑してさ、

だから、空っぽじゃないと誰も連れて行けぬのだよ。

だなんてさ、本当はどうでもいいくせに、悲しそうなフリして笑うんだなあ…。

ならば、全てを明け渡そうか？

どこまでもそう…連れて行ってくれよ。

退屈しのぎにさ。

そして、風は小さく笑って拒むように吹き荒んだ。

冗談に決まってるだろうって。

ほらね、やっぱり。

お前は誰も要らないんだ。

ひとりがいいって。

空っぽで居たいって、思ってるんだよな。

こっちこそ…冗談に決まってるだろうってさ…。

笑ってやるつもりだったんだけどなあ。

先に、言われちまったよって…くしゃりと髪をかきあげて座り込んだ。

なあ…お前は怖いから何も本気にしないんだろ？

失くすのが怖いから何も要らないって嘯くんだろ？

ずるいよなあ…ホント。

ホントは寂しくて仕方ないくせに。

否定

…さあ、病んでゆけ。

どこまでも深く深く貪欲に私を追い求めてみよ。

もう二度と見つかりはしないモノにいつまでも縋り付いて。

そうして必死にいつまでも時を刻むというのなら、そうだな…そうだ。

そのときはお前に褒美をやろう。

私を忘れなかった礼だ。

お前を迎えに行つてやろうぞ。

思いを断ち切れずにずるずると生きた愚か者よ。

私はお前を恨むぞや。

空は晴れた。

ある昼下がりの事。

独り膝を抱えていじけていたら、声をかけられた。

何故、お前は生きることが拒むのか？と。

僕は顔を上げて答えてあげた。

君が居ないからだよ、と。

そしたら。

莫迦を言っな。

お前が私を死に至らしめたんだろうが。

にこつと笑った僕の顔を認めたら。

そしたら、君の失笑を買ってしまった。

皮肉気に口角を吊り上げて。

あ…。

顰蹙も買っちゃったな。

とか思ったりして。

また膝を抱えなおし、うずくまる。

ごろんと平らな床に倒れこんで、それでも膝を抱えたまま。

君が早く消えてくれないかと。

どうせ幻に過ぎないのだから余計哀しくさせられるから、もう消えてくれないかと。

思っけれど。

でもね、それでもね…まだどこかで君を求めているんだ。

探してる、今も。

ああ…。

目頭が熱を持ち始めた。

早く早く早く…消えてくれないだろうか。

好きだけど、消えてくれよ。

君はもう…居ないんだろう？

知ってるよ、そんなこと。

馬鹿だってよく言われるけれど。

君にもよく莫迦だつて言われたけれど、それくらい僕だつて。

知ってるよ。

目を逸らして、それでもまだ消えない　消えてはくれない君の
気配に。

泣かされそうだった。

涙が出そうだと、下唇をぎゅっときつく噛み締めて。

そしたら、君が僕に触れてきて。

ぽろっと涙の粒が零れ落ちた。

わしゃわしゃと、乱暴な手つきで頭を撫でてくれる君は偽者のは
ずなのに。

懐かしくて。

ぱたぱたと、涙の雫が床を濡らしてく。

汚いな。

みつともないな。

……情けないな。

色々な感情がない交ぜになって、どうしようもなく息苦しくなっ
た。

ぎこちない手の慰めによって堰を切った涙がぼろぼろ…と。

座り込んで膝にひじをついて僕を見下ろす君が照れ隠しのよう
に空を仰ぐから…。

たまらなくなつて震える手を伸ばし。

君は誰だ？

問いかけながら。

私はお前に殺されたカワイソウナ私だよ。

そう返されると予測しながら、抱きついた。

案の定、君はそう言っておとなしく僕に抱きしめられたね。

どうして？

お前との約束だ。

お前がずっと私を忘れずに醜く、それでも必死にお前が時を重ね
たのなら迎えに行つてやるとな。

ああ…そっか。

そうだったね。

じゃあ、君は本物なんだ？

肉体を持たぬモノに本物も偽者もない。

ぼたぼたと、流れ落ちていた涙。

水溜まりが、出来ていた。

僕の心の悲しみの水溜まり。

深い深い…水溜まり。

僕を捕らえて、君を包み込んで。

そしたら、きっと弾けて消えるんだろうね。

いいよ。

君と一緒になら、僕は地獄でもきつと幸福を感じられるだろうから。

空は割れた。

ある夕暮れの事。

病んだ。

已んだ。

ヤンダナ、莫迦めが。

どうか忘れてくれるなど、そう命令したのは私だが。

ああ… 本当にお前は莫迦な子よ。

最早私はお前など愛していないというのに。

お前は私を忘れられずに、命令に従ってほうけて生きた。

恨んでいるぞ。

憾んでいる。

悲しみに明け暮れ、真っ直ぐに生きなかつたお前を。

私の欲した生を否定したお前を。

与えられているのに拒否していたお前を。

それでも約束のために必死に時を刻んだよな、お前。

..... 莫迦な子.....。

蜂蜜と

いい。

いいて。

いい。

いいんだって。

…いいの？

いいんだよ。

どこへでも行っているの？

どこへでも…飛びたってゆけ…。

そう言つと、悲しそうに笑うその人は僕の手を強く握り締めた。

だから、僕も微笑して弱々しくその手を握り返した。

風に流れる香りに意識を集中させて、今はそれだけを心に思った。

ああ…蜂蜜のように甘い君の匂い。

いつも香ってきてたけど、君って蜂蜜好きだったかな？

それともそれが君の匂い？

…判ってる。

解ってるよ。

後少しで離れるから…それまではどうか君はこの手を放さないで。

……。

……。

そして、僕はゆっくりと君の手から自分のそれを解いた。

ごめんね、ありがとう。

…どう致しまして。

蜂蜜のように。

甘い…甘ったるい匂いをさせて。

漂わせて、身に沁み込ませて。

蜂蜜でも全身に塗りたいくってるの？

と半分冗談で半分本気で、失笑しながら訊くと。

そうだねって、君は笑った。

そうなの？って。

…ちがうよって。

僕の手を握っては放して…そんなことを繰り返しながら。

そう…何度僕達はそんなことを繰り返しただろう。

ねえ、やがては君が僕の手を放してどこかへ行ってしまうのだろ
う？

寂しそうに笑ってさ。

それでも行きたいって苦笑しながらさ。

ねえ、そのときもやっぱり蜂蜜のように甘ったるい優しい香りを身にまとって、旅立つ？

貴方はここに居てねって…酷い言葉で僕をこの地に縫い付けてさ。

君は僕独りを置いていくの？

その匂いさえも僕から奪ってさ…連れて行くのかい？

君が居るといふ証を。

一緒に何処へと…。

寂しいな。

悲しいな。

行つて欲しくないよ。

ここに居て欲しい。

ここに居てくれたらいい。

どこにも行かないでと、行くなときつく言つてそのカラダを押さえ込めたらよかったのに。

でもね、やっぱりそうは思つても思つただけで。

何もしないんだよ、僕は。

何も選ばない…選べない。

君に任せるだけ…君の自由だからね。

だからさ…行っているよ、

今までここに居てくれてありがとう。

行っているよ…。

どこまでも気が済むまでさ…旅をしておいで。

楽しんでおいでよ。

僕はここで待ってるからさ。

寂しさを我慢できなくなったらいつでもいい…いつでも帰っておいで。

ざわりと風がうなった。

風にまぎれて運ばれてくる匂い。

鼻孔をくすぐるこの甘ったるい感じは…。

……。

振り返る。

逸る鼓動を落ち着かせながらゆっくりと後ろを振り向いた。

そしたらそこには…。

僕の顔から消え失せていた笑顔が瞬間、零れ落ちた。

ただいま。

おかえり。

甘い甘い蜂蜜の香り。

それが運んだ君の居場所。

もう大丈夫だよ。

君の場所は誰も奪わないから。

誰も責めたりはしないから。

ここに居ていいよ。

よく帰ってきたねって頭を撫でてあげる。

帰ってきてくれて嬉しいよって抱きしめて上げるから。

そしたらね、絶対笑顔でお帰りって言ってあげるから。

だから、いつかでいい…帰っておいで。

君におかえりを…

ねえ、あげるから。

僕にただいまを…

ねえ、ちようだい。

盛の夢よ…

「掘り返したよ。」

掘り返した。

過去の栄光を。

誇りを。

ずっと昔に胸にしまって今の今まで自分を蝕んできたものを掘り起こして。

「ゴミ箱に捨てたよ。」

ためらいがちに伸ばした腕にこめられた想い。

それは未練。

けれど、堅く握り締めた掌に隠されたそれは震える掌から放り出された。

「投げ捨ててやったよ。」

痛いくらいの想いを。

いつそ苦しめるのならば、要らない。

そんな強がりを書いて。

意地を張って。

ぽっかりとできた穴。

ぱっくりと裂けて開いた傷口に滲み出る血液。

額に浮かび上がる脂汗に。

激痛をかみ殺す唇。

痛々しいほどの姿に同情をするもの数知れず。

「何故にそれほどまでに強がるのだ？」

その問いに答える声は、擦れた声なき声。

「過去の栄華を今一度忘れるためです。」

でなければ何の道も開かれない。

自惚れは愚かしい。

浅ましい部分を滑稽なほどに明らかにしてくれる。

ゴミ箱に落とされた過去の栄華よ。

無かった事にされこそしないが、お前は必要がないと言って。

邪魔なのだと言われて忘れられる悲しき結末よ。

もし、誰かに見つけられたとしても持ち主はお前を拒絶する。

「両者哀れなことよ。」

浸透する音に誘われて背を向ける。

もう終わったのだと、それだけを告げて。

去り際にそつとぼそりと……聞き取れないくらいに小さな声で礼を零す。

「有難う。」

お前は最高であつたと。

掘り返した胸につつかえてた過去の宝。

過去の遺物よ。

それを土に返して、私は行くよ。

ふらふらと覚束ない足取りで地を踏みしめて。

痛みに顰められた眉と、噛み締められた唇。

頬を滑り落ちるのは汗か……はたまた真珠の雫か。

服にシミを作るのは野に咲く赤い花の嘆き。

斑に描かれる時間の経過とともにひろがっていく地図。

やがてオサマルダロウ事を祈って。

「私は行くよ。」

過去に頼らない。

過去に囚われない。

少し汚れを帯びているけれど、それでも明日を生きるために。

私は行くと感覚のない足で地を踏みしめた。

判別

質の悪い冗談だ

そう呟く君の声が空洞な僕の心に響き渡って。

そして、浸透した。

ねえ、君はさ本当は気付いてるんでしょう？

知っててさ…笑うんでしょう？

そんなふうになさ…残酷だと言って微笑する。

悲しさと切なさややるせなさと…暗い感情がない交ぜになったそんな笑顔で。

僕を見てさ、嘘つきだなんて唇だけで呟くなんて。

器用なことをするね。

僕だって君の事、嘘つきだっていつも思ってるよ？

馬鹿だねって呟いてる。

残酷だとも嘆いてる。

だから、きつと僕も…自分が気づいてないだけで君みたいな笑い方をしてるんだろうなあ。

最高で最悪な二人だな。

いっそお似合いだとも言えるさ。

でもね…僕をこんなふうにしたのは君だよ？

好きだよ

面白い冗談を言うね

その言葉は空虚な俺の心を失望させ、胸の奥底へと沈みこんだ。

拾い上げようとしなかったよ……いつもみたいにお前の言葉を。

今回は耳を塞いだよ。

塞いでやり過ごした。

軽い気持ちで口にしたんじゃないと反論こそしなかったけれど。

冗談だと受け流して、いつもみたいに笑って片付けることも出来なかった。

本気だってお前、知ってただろう？

知っててわざと気付いてないふりをしたな。

お前はいつもそうやって俯いて笑うんだ。

話を聞いてるふりして、その実まったく聞いていない。

俺をちゃんと見ようとしなのは何故？

目があったときは必ずといっていいくらいお前は呪文のように嘘つきって、唇だけで告げてくる。

器用なことをする奴だな。

俺だってお前のこと、いつも嘘つきだっと思ってるよ？

馬鹿だっぺ責めてる。

残酷だっぺ怒ってる。

そんなところは嫌いだとも思ってる。

悲しそうな辛そうな痛そうな……そんな顔でいつも微笑してるお前なんか俺はみたくなんてないのに。

お前はいつもそうやって生きている。

如何なる時も。

だけど、そんなお前を嫌がってる俺だっぺきつと人には言えないだろう笑い方をしてるんだと思う。

最高に最悪な二人。

いっそ滑稽だとも思っさ。

でもな…俺をこんなふうにしたのはお前だろ？

嫌いだよ

君の事なんて。

お前の事なんて。

好きだよ

君の事が。

お前の事が。

暗く仄かに咲くその笑顔が、いつか明るく満開に咲き綻びますように。

そして、今日も二人は笑いながら冗談を口にする。

判別（後書き）

祈りさえも「冗談だと嘯きながら…」。

強敵の名は

ブルルルルル…。

友人から一本の電話があった。

俺はそれを取った。

その内容は。

「ちよつと来てくれ。頼む。敵が倒せないんだ!」

援護だった。

救援とも言うのだろうか。

それとも応援だろうか。

どっちにしろどれも似たような意味合いを持っていることに変わりはない。

要するに助けに來いと言われているのだ。

俺はどんな奴なのかと尋ねた。

友人は早口で答えた。

恐らく今敵と交戦しているのだろう。

倒せないという割にはたいした余裕ではないか。

電話片手に強敵（友人曰く）と戦ってるなんて。

それ、本当に強敵か？

俺が行く必要なくない？

昨日の飲み会の二日酔いで超気持ち悪いんだけど。

俺は今、二日酔いという名の敵と戦っているんだが。

すげー強敵だぞ？

そんなときにお前の応援？

ふざけるな。

そんなもの知ったことではない。

でも、ま、どんな敵かだけは聞いてやろう。

「多分なんかどろどろしてる奴。姿は見えないんだが、目が覚めてから俺だけを集中攻撃してくるんだ」

「はあ？」

どんな敵だよ。

お前姿もわからない敵とどうやって戦ってるって言うんだよ。

そして、俺にそんな奴とどう戦えって言うんだよ。

友人は続けた。

「昨日そいつはおとなしくて、実に美味そうだった。俺はがぶがぶ口にしたよ。そしたらこんな目にあった!」

女か…?

「女の恨みでも買ったのか?お前は今それと戦ってるのか?悪いことは言わん。さっさと謝っとけ」

「違う!!女よりはましだけど厄介なものなんだ!ちよっ…頼む。マジ助けに来てくれよ」

「……」

俺はしばし考えた。

二日酔いでつらい中、外へ出歩きたくはないのだが…。

「…わかったよ」

俺は了承した。

どんなのかはよく判らない強敵と戦う友人を助けに行くことに決めた。

「そうか…すまない。恩に着る。さっそくなんだが、この強敵に

よく効く薬液を購入してきてもらいたい」

薬品？

「薬なんかで倒せるのか？…本当に俺必要なのか？」

薬程度で倒せるのなら俺やっぱ必要なくね？

「ああ。今の俺にはお前が必要なんだ。じゃないと敵が倒せない」

…どんな敵なんだよ。

ますます判らなくなってきた。

まあ、行ってみれば否応なく判るはずだろう。

とりあえずどんな薬液なのか訊ねてみる。

友人は言った。

ひどく苦しそうな声で。

やはり余程手強い相手なのだろうことがうかがい知れた。

「どんな薬なんだ？」

「液伽辺だ」

……。

こうして友人の二日酔いは俺のおかげで治った。

そして、皮肉なことに俺の二日酔いもどこかへ吹き飛んでいた。

繋がれる世界

命を張って救ったよ、助けたんだ。

命を張って護ったよ、守ったんだ。

あの、小さな輝きを、かけがえのない生命を。

護れたんだ、この腕で。

守れたんだ、この手で。

約束したよ、あの生命と。

一緒に生きようねって。

一緒に頑張ろうねって。

ずっと傍に居るから大丈夫だよって。

だから、泣かないよって。

助けてあげるって、言ったんだ。

壊れそうな細いカラダを抱きしめて、笑って言った。

強がって言った。

…うつん、強がって言ったんじゃないよ。

本当になることを祈って言ったんだ。

この生命がどうか生きながらえますように、と。

精一杯のことはするって決めた、自分のなかで。

けれど、それだけでは心許無くて祈りもした。

どうか…と。

救えたね。

私のこの身で、君を。

君の未来を繋げたよ。

だから、ねえ…これからいっぱい泣いて怒って笑おうね。

私はずっと君の傍に居るから。

私だけはずっと…何があっても君の味方。

守ってあげるよ、独りで歩けるようになるまで。

意識が朦朧とした苦しいなか、私は君をこの世界へ産み落とした。

『
初めまして
』

そして、ありがとう。

生まれてきてくれて。

私の許へ来てくれて。

君に幸多からんことを、私は願います。

道標

まずは知り合いを演じて。

それから友達を演じて。

そして、恋人を演じて。

家族を演じた。

それから最後に他人を演じた。

だって、ねえ… 本当の僕等は互いに敵同士でそれ以外の何者でもなかったんだから。

僕等はお互いの立場を忘れて、そんなふうにだんだん親しく変化していく役を演じていた。

演じていただけなんだ。

僕等は選べないんだった。

僕等は初めから決められていた。

敵同士であると。

だから、それ以外の何者にもなれないのにな…。

なっ たつもりでいただなんて、笑わせちゃうよ。

本当の立場に戻ったあと、気を遣ってくれる皆に敵であることに
悲しみもなにもないって、言った。

そしたら皆悲しそうな目で僕等を見ていた。

嘘をついたのかな、僕等は。

それとも嘘をついてないのかな、僕等は。

どっちなんだろう。

悲しいのか、悲しくないのか…。

判らないまま、そして、僕は君に銃口を向けた。

その瞳に僕の、恋人だった人への未練が見える気がして目を合わせ
せなかった。

合わせることが出来なかった。

お互いに、己の顔がその人の瞳に映ることを嫌がった。

否応なく、敵同士で今この場で対峙しているのだと認めたくなく
て。

まだ…こんなになっても僕等は情を捨てきれずにいたよ。

捨てきれずに、ずるずると今日まで生きてきた。

敵同士であることを認めるのを拒絶して、拒否して。

それでも敵である君の仲間の命は奪ってきたよ。

だって、敵だもん、彼等は。

敵以外の何者でもない。

だからそう…遭遇すれば排除するだけ。

そして、今…この戦場で君ともとうとう遭遇してしまった。

そうだね…。

僕は言っただよ、君に。

君も言っただね、僕に。

『今から自分達は敵同士です』

そう言った。

もちろん、軽い気持ちで言っただんじゃないよ。

流されて言っただんじゃない。

でも、自分たちが望んで言っただ言葉でもないし、軽い気持ちで言っただいいことでもなければ、軽い気持ちで言えるような台詞でもない。

でもね、僕等には覚悟と決意が必要だった。

声に出して直接君にぶつけければ、自覚すると思ったんだ。

明確に出来ると思った。

君とのラインを。

けれど、僕等は境界線も曖昧なまま背を向けてしまったね。

想いを捨てきれずに、割り切れずにここまで来てしまった。

君はきつと素直に降伏してくれはしないだろう。

…君はいつだって高姿勢を崩そうとしない。

今の状況を解っているのだろうか？と思わずにはいられないような強気な態度で。

いつだって凜と背筋を伸ばした澄ました顔つきで。

僕に刃を向けてくる。

戦う必要がどこにある？

君はそんな問いかけもせず、させてもくれずに有無なく交戦をしかけてくるけれど。

僕等はあるなにも互いのことを理解できていたのに、どうして戦う必要があるのだ？

僕等は理解できるよ。

互いに歩み寄って、全てを曝け出せば。

うつん…、全てを曝け出すと行かずともその手に握りしめられた武器を捨てて、代わりに互いに手を取り合えば、それだけでいい。

たったそれだけの簡単な動作で僕等は変わるよ。

争いのない世界を作れるはずなんだ。

だからさあ、ねえ…まずは僕等が手本になろうよ。

誰かがその道を示してあげないと、今の世界は変わらない。

対立していた者同士が手を取り合うのは確かに難しくて。

手を取り合っても何をしていけばいいのかが判らなければ、すぐ元に戻ってしまう。

だから、僕と君が手を取り合うことで、争わなくとも生きていくよって事を証明して見せようよ。

そのために君もその手に持つ武器を捨てて？

僕はもう捨てたよ。

必要ないからね、そんな物騒なものは。

僕が武器を捨てて、両手を差し出せば君も武器を捨ててくれて。

僕の掌の上に自分のそれを重ねて笑ってくれた。

そうですねって。

必要ありませんよねって。

この手と手さえ重ねあせるだけで私達は戦わずして生きれるはず
です。

君はそう言って、僕の手を握り締めた。

もう何も演じなくていい。

もう敵同士ではない。

本当にただの好き合う者同士。

それだけの自分たちでいいのだ。

皆に示そう。

僕等は解り合えるのだと。

その手に持つ、人の命を奪うだけの道具は捨てて、自分の手と相
手のそれを重ね合わせて握るだけで…ね。

ほら、世界は良い方へ変わってゆくよ。

地藏と半分こ

お地藏さまからのお願いです。

お供え物は勝手に食べないで欲しいなあ。

お地藏さまもおなか減っちゃうんだからさ。

そのへん気をつけてね！

って言ったのに、また盗られてしまった。

お地藏さま、言ったよね？

おなかすくから横からとってかないでって、言ったよね？

あゝあ…もう…。

最近は昔と違ってお地蔵さまにお供えものしてくれる人、余りいないんだよ？

貴重なの。

お地蔵さま、体重くて動けないからなかなか食べ物確保できないの。

…じゃあ、食べないでダイエットすればいいって？

ダイエットしてお地蔵さまの体が軽くなるかって…なるわけないじゃん！

生まれたときからこれだよ？

お地蔵さまが食べるからこんなになっただんじやないからねっ！

そこらへんご理解頼みます。

…って、聞いているの？

ねえ！？

聞いているならダイエット貢献…なんて言ってお地蔵さまのお供え物食べないでってばっ！！

お地蔵さまからのお願いです。

お供え物は勝手に食べないで欲しいなあ。

お地蔵さまもおなか減っちゃうんだからさ。

そのへん気をつけてね！

ある日、喋れるはずのないお地蔵さまが自分を見てそう言った。

穏やかに笑った顔のままで。

お供えしてあったみかんを食べていたら、そんなふうに言われた。

…もしかして最近毎日のようにここに供えられていた食べ物を食べてくから、その恨みの念で喋れるようになったんだろうか？

恐ろしい…。

これぞまさに食べ物の恨み！

そついや食べ物の恨みは深いって言うけど、私祟られるのか？

…このお地蔵さまに？

ぷつと笑いがもれてしまった。

おやおや…いけない、いけない。

もっと恨みを買ってしまうではないか。

お地蔵さま、食べ物とつてかないでって言ってる。

あれ…怒ってるんだよね？

顔、笑ってるけど内心怒ってるんだよね？

…お地蔵さまだから仕方ないのだな。

怒った顔ができないんだな。

お可哀そつに…って違う。

えー…なにになに？

体が重くてなかなか食べ物確保できないからとらないでって？

じゃあ、ダイエットしよう！

それだったら好都合じゃない！

まさに一石二鳥…そうでしょ。

私の胃も満たされてお地藏さまもその見るからに重そうなボディの軽減ができるし…最高じゃない？

…えー…そういう問題じゃないって？

お地藏さまの体はそれで軽くならないって…元々そうなってるんだよって？

んーじゃあ、今日の分は私の。

次はお地藏さまに譲ってあげるよ

私が食べるのには変わりはないけど、ま…これで解決ってことで。

もおケチケチ言わないのッ！

そんな顔してるんだから心ももっと寛容じゃなきゃね

…ここに供え物してくれるおばちゃんの手持ってくるものって全部美味しいんだもん。

食べなくなるのも仕方がないよって許してちゃんヨ

ね、ねっ。

…『ちゃんヨ』が古いよって突っこまないでよ。

お地藏さまああ…。

落とし穴

テスト用紙。

意味の解らない文章や数字がずらりと無造作に並べ立てられているだけの紙。

白紙で出そうか。

解答用紙は。

問題用紙には漢字の訂正と英語のスペル間違いの訂正を指摘してだしておこう。

こんな問題、やってられない。

こんな間違いだらけのテスト、受けてられない。

文法を無視した文章。

方程式を解さない問い。

すべての法則を無視した理科の問題。

示された時代と内容が一致しないのにそれには触れてこない社会の問い。

一体これで何をはかろうというのか。

少年はふざけるのもいい加減にしろと配られたテストの解答用紙には名前だけを記入して。

問題用紙には全ての誤りを訂正してだした。

もちろん、問題用紙にも名前を書いて。

別に先生達を挑発したり馬鹿にするつもりでしたんじゃないけれど。

なんだかこんなでたらめな問題を出されると訂正を入れて突き返したくなるってものだろう。

ああ…でも、それは自分だけなのかもしれない。

みんな周りはカリカリと紙をはじくシャーペンの音だけがする。

訂正を入れてるんじゃない。

必死ででたらめな問題を解こうとして躍起になってはじく音だ。

そんな…解けるはずないじゃんか。

そんな問いに答えは存在しないんだから。

少年は教卓に立つ先生に問題用紙と解答用紙を渡して教室をさっさと出た。

本当はチャイムが鳴るまで席を立つのはいけないことだったけれど。

この教室の空気を一秒でも長く吸っていたくはなかったのだ。

だから、少年は間違いだらけの問題に悪態をつきながらも睨みあい、向き合う同級生達を置いて出て行った。

…馬鹿らしい。

そう思いながら……。

数日後、少年のもとに進学校合格の通知が届いた。

なんと受かったのはこの少年1人を除いて他にはいなかったという。

学校側としても来年の新生が1人だけとはまた困った話だろうが、それも仕方ない。

あんな卑怯なテストを作ったんだから…自業自得だともある意味言えた。

気付かなかったほうもどうかと思っただが、それだけ真剣だったってことだろう。

問題用紙がちゃんと見れないくらい。

それがおかしいことに気付けないくらい。

解くことばかり考えて問題がおかしいことに気付かないなんて…盲点もいいところだとも思っただけれども。

受験で試されたのは問題を解ける学力・能力だけではなかった。

真に試されたのは問題の誤りに気付くかどうか…そこを試されていたのだ。

解く力ではなく、重点はそこに置かれていたのだ。

私という人

大好きだった匂い。

消えていく後姿。

遠ざかる足音に。

冷めていく温もり。

聞こえていた騒音に、いちいち心を揺さぶられるな。

私は私。

それだけでいいの。

それだけでいいはずなの。

それだけでよかったはずなの。

それなのに。

私は私？

誰が私？

私は誰？

大好きだった香り。

見えなくなっていく後姿。

遠ざかる話し声に。

なくなっていく体温。

聞こえていた騒音に、いちいち心を揺さぶられる。

ねえ、ねえ…。

私、泣いていいの？

私、泣いているの？

私、泣きたいの？

零れていく涙が私を混乱させる。

けれど、それによつて私が明確になる。

あやふやだった私が他とくつきりと境界線を引かれる。

私は私。

それでいいの。

それがいいの。

そうでいたい。

それが当たり前なの。

他とは違う。

私はわかる。

私が私であるという事を私はちゃんと知っている。

この声も、このカラダも、この涙も、この足音も、この影も、この匂いも、この体温も。

私だけのもの。

私に与えられたもの。

私の所有できるもの。

他の誰も私にはなれない。

他の誰かに私はなれない。

どんなに姿形を似せて作っても…。

同じ遺伝子を持っていても…。

私は私だけ。

私だけが私。

私はこの世にただ1人よ。

ただのひとりしか存在しないわ。

私は私。

私は私ですつと生きるのよ。

私のままで私であることを貫いて。

それが私なの。

私が私であるということはそういうことなの。

死んで手に入れたもの

立ってたと思ったら

座ってたと思ったら。

「……………」

立ってたと思ったら

座ってたと思ったら。

「……………」

座ってたと思ったら

立ってたと思ったら。

「……………」

立ってたら…座ってたら…？

「……………」

首をかしげる俺を、ちょっと距離の置いたところでさっきからじつと見つめる少年が1人。

なかなか熱烈な視線だ。

だけど、悪いな。

俺はお前の好意　恋心には応えてやれん。

だって、俺はノーマルだからな。

少し可愛い顔してるからって付き合ってなんかやらんぞ。

にしてもなんで俺、こんなこと繰り返してんだろ…？

立っと思ったたら

座ったと思ったら…。

「立ってるのか？俺は。それとも座ってるのか？」

…！

おおっと…少年が俺に近寄ってきた。

おいおい…こんな道端で野郎に告白タイムか？

やるねエ…少年よ。

…でも、なんでだろ。

なんかあの少年の眼、腐ったものを見るような…軽蔑した感じじゃないか？

なんか言ってる。

…んゝよく聞こえないぞ。

告白ならドン！とやれよ。

お前の想いには応えてやれないが、その気持ちは受け止めてやるから。

…え？

なんて？

「早く成仏したほうがいいですよ」

「…は？」

成仏？

なんのこっちゃ。

電波か？

こいつ、可愛い顔して電波はいつてんのか？！

それとも何だ？

新手の詐欺っ？！

それとも宗教勧誘ですかっ？

「えーっと…宗教はお断りですっ！俺、もう悟り開いてますからッ！」

「いや、そういうんじゃない…貴方死んでますよって。さっきから言おうと思ってタイミング見計らってたんですけど…」

「いやいやいやいやいや…！！俺死んでないって！！何言っちゃってんの？！」

「あー…じゃあ、貴方今何してたんですか？」

「立って座って…立ってるのか座ってるのか判らなくて考えてたんだ」

「足元見れば手っ取り早いじゃないですか」

「見たよっ！けど、見えな…　　っっ！！？うおッ！？なんだこれ、俺足ねーじゃん！！っことは死んでんじゃん！……道理でわかんねーはずだよ…どんだけ馬鹿なの、俺…」

「だから、言っただけでしょう」

「でも、マジで？なんで、どーして…」

「何もないところで派手にずっこけて頭ぶつけて、打ち所悪くて…大量出血で血が足りなくて運も足りなくて…死んだんです。因みに今日が貴方と俺の四十九日です」

「うつわー。うつそーん…かつこわりい死に方だな、俺エ…。あれ…？でも、『貴方と俺の』って…君も死んでるの？俺と同じ日に

「？」

「はい。貴方がバランスを崩して前へ転ぶ際に目の前を歩いていたら何の関係もない俺を見事に巻き添えにしてくださったおかげさまで……」

「……」

「まったくどうしたら前を歩いてた俺を巻き添えにして死ぬんですか。理解不能です。もし仮にこの先理解できたとしても許しはしませんかね」

「……君も打ち所が悪くて……？」

「その前に俺に何か言うことはないんですか？」

「すみませんでしたあああああ……！！！」

「はあ……。打ち所が悪かったというか俺の転んだ先には何故か粉々に割れたガラスが大量に散らばっていて、おまけに空から植木鉢が降ってきて頭に直撃。言うならば転びどころが悪かった……ですね。全身血まみれになりました。その点、貴方は本当にただ打ち所が悪かっただけ。転んだ先には俺の足があっただくらいですもん」

「かなり情けない死に方だったみたいだな、今の話によると……」

「ええ。かなりです。きつと新聞に載りましたよ、あれは。端っこのほうだと思えますけどね。そして俺は不幸人として名前を載せられたんだ……きつとっ！」

「まあまあ、落ち着けよ。もう済んだ事だし、死んだんなら関係ないって。な？」

「…気楽でいいですね、貴方は。俺、あの日から数えて明後日の日に結婚する予定だったんですよッ！？どーしてくれるんですかっ？」

「それはそれはご愁傷様です。……って、え…ちよっ、お前今何歳だ！？」

「享年29ですっ」

「はあっ！？詐欺だ！んな顔して三十路前だったなんて」

「そういう貴方こそ大分歳いつてるんじゃないですか？そんな馬鹿な子供みたいな顔してますけど」

「…失礼だね」

「事実を述べたまでです。で？」

「30です」

「ほら、やっぱり。俺をみて詐欺だというのなら貴方も同じですよっ」

「…うん、そだね、ごめん。悪かった」

「そんなことはどうでもいいです。それよりどう責任とってくれるんですかっ？俺の幸せ奪っておいて！」

「どうって…じゃあ、結婚するか？俺とさ。死後の世界で新婚さんする？夫婦になっちゃう？」

「……ふざけるのも大概にしてくれませんか？」

「ふざけてなんかいないよ。だって君、幸せになりたいんだろ？じゃあ、俺がそうしてやるって言ってるんだよ。なんたって俺の責任だからな」

「な…っ！べつ別に貴方と結婚したくてそんなこと言ったんじゃないからねっ！」

否定しないってことはOKなのか…。

ん…？

ちょっと待て。

どこかでこんな感じの…見たことあるな。

……………ハっ！

あのツンツンとした感じの台詞と態度は…。

来たああー！！

ツンデレさんだったのかあ…お前！！

大好物だ！！！！

じゃあ、この場合落とすには…。

「お前、俺と結婚するの嫌か？」

下手にでる。

好意を寄せている者に対してだけでるツン。

それが今俺にむけてだされていた。

ということはこいつ、やっぱり俺に好意寄せてるんだなあ。

はじめはその気なんてさらさらなかったけどさ、こんなことされたら可愛く見えるわな。

で、こう言われたらツンデレは絶対ああ言う…。

「…貴方がどうしても言うのならしてあげないでもないです…。けどっ！俺が貴方と結婚したいんじゃないですからっ！勘違いしないでくださいね…！」

リンゴーン…

ああ…来た。

正解だ、俺。

死んだけど春はつかんだよおお…！

「おうよ！任せろ！絶対幸せにしてやるからなっ」

「…本当でしょうね？言ったからにはちゃんと責任とってもらいますからね」

「望むところだ」

ということ気付かない間に命は落としてたけど、可愛い嫁（？）を手に入れたんだぜ。

でかした俺っ！！

……………まだ、名前も互いに知らないけどさ。

理

幾つもの命を看取って。

幾つもの命の誕生をこの身で感じ取って。

心が温かくなるのを覚えて。

カラダが温かくなるのを知って。

じんわりとした温度に、ほろりと涙を流した。

ねえ、ねえ…この星には幾つもの生命が同時に存在しています。

共生して生きています。

始まりがあって終わりがあって…。

樹齢千年を数える木だって私には到底敵いません。

私より先に朽ちていきます。

実に悲しいことですけど、必ずと…胸を張って言えてしまえます。

そんな長寿の木が芽吹く初めから、朽ちる最期までを見届けられる者はまずいないことでしょう。

みれるなら始まりか、途中で、最期かの…いずれか。

この世の法則を破ってはいけませんよ。

けれど、私のような存在はそれを簡単に無視した歳月を生きています。

いつ果てるのか判りはしない。

いつ生まれたのかも思い出せはしない。

この世の星の生き物は皆生まれてきては無に帰ってゆく。

私の感覚ではあつという間に居なくなってしまうのです。

決して交わりは出来ません。

同じ時を生きていても、同じ時に私は生きていないのだから。

私は死ねません。

皆と同じように時を積み重ねていくことは不可能です。

大好きな人も大好きだった人も友人も恋人も…皆私より先に死んでゆきます。

その時は必ずやって来るのです。

側に居てくれると言ってくれた人も、約束を破って死んでゆきました。

ごめんと一言残して。

私はいつも見送る側の者なのです。

昨日生まれたと思っていた子供が気付いたら年老いた身体で孫たちに囲まれていました。

私は全ての生命の誕生に居合わせる者。

そして、全ての命の終幕に居合わせる者。

私はどれほどの涙を流したことでしょう。

幾千もの命を看取ってきたとしてもそれでもこの涙は枯れることを知らぬのです。

学ばぬのです。

慣れる事も知らぬのです。

知ろうとしないのです。

判ってはいるのに、悲しみはやはりやってくるのです。

新しい生命の誕生は新しい悲しみの匂いを乗せてやってきます。

始まりには必ず終わりがついてきますから…。

喜びの合い間に漏れてくる死の匂い。

それでも私は今尚ここに在り続けるのです。

この世の全ての誕生を慈しみ、そしてまた誰かを愛しむのです。

大好きですよ。

私は私の身の回りを取り囲む全てが大好きです。

花は散ります。

ですが、また来年咲き誇ります。

人もそれと同じなのです。

芽吹き、地に足を下ろして散るまでの間を美しく咲き続けます。

そして、種を残して新しい花を咲かせる　。

人も花も同じです。

脆く、弱く…でも、逞しく繊細な生き物なのだという点において…。

幾つもの生命を看取って、そして、これからもきつとたくさんの生命の終わりを看することでしょう。

それはとてもつらく、悲しいことです。

ですが、それと同じ分だけの生命の誕生を喜ぶことができ、慈しむことができるのです。

生まれて死に逝くのは人の世の理です。

この世の条理です。

それに抗う者として私は見届ける義務があります。

どうか健やかにお育ちよ。

どうか安らかにお休みよ。

どうかまた会いに来て下さいな…。

いつか誰か…私の終わりも見届けてくれる者が現れるのでしょうか…。

ならば、それはいつたいつの話になるのやら…。

ただ…もしあったとして、はつきりと判っていることはそれがまだまだ気が遠くなるような先の、未来のことだということなんですよ。うね。

色チェンジ。

私はイロのなかで生きている。

たくさんのイロのなかで…そう、私は生きている。

与えられた色。

私が背負う色。

ねえ、それって私の色？

私だけの？

私に合った、色？

宿命だとか運命だとか…そんなものに振り回されるのは正直言つて馬鹿らしい。

アホくさい。

決め付けられた色に束縛されて心をかき乱すのも…なんだか嘲笑われているようで気に食わない。

だから、私はいつもドライ。

全て見下して見るわ。

客観的に。

…生意気な私。

大っ嫌いよ。

あの色も…。

見ただけですぐ私だって判るもの。

私は黒が好き。

暗闇にまぎれて生きる者になりたい。

光は私には眩しすぎるから。

だって、私はドライだから。

目立ちたくはないのよ。

白い色でもいいかなって思っの。

白。

白の中の白の本当に真っ白で誰も気づかないくらい白い色を背負った私。

素敵だわ。

けれど、唯一の問題は白は汚れが目立つ…これ。

だから、私は黒がいいの。

多少の汚れなら判らないでしょ。

だから、好きよ。

私が紛れ込んでも判りはしないわ。

けれど、現実は違うわ。

そんなこと、本当は考えるだけ無駄なのにね。

私の色はもう決められてあるんだから…。

「ねえ、ちょっと。私のこの色どうにかならないの？」

（黒）「いいやないか、その色。いかにも女って感じがして」

「ピンクはたしかにいいわよ。けど、戦隊ものでそれってなんかイラってくるのよ」

（白）「えー、じゃあ、俺はどうするんだよ？」

「何？白が気に入らないなら色々な色をこちゃ混ぜにしたペンキでもかけてあげましょうか？」

（白）「…遠慮しとくよ。俺、白大好きだもん。うん…汚れやすくてさ」

「汚れやすいくせにあんた存在感薄いわよねー。白だからかな、やつぱ。色薄いと存在も薄くなるの？…私、黒がいいー。ねえ、そのでっかいの！私のピンクと換えなさいよ」

（黒）「えっ！いややわ。ピンク、だせーもん。」

「…あんたもダサイわよ。大体戦隊ものってなんでカラフル全身タイツなの？」

（黒）「そういえばそうだなあ…けど、もう相場が決まってしまつとるし。ヒーローは素顔では戦えないのさっ！」

「カツコ悪。」

(白)「ピンクがそんなに嫌なら赤とか青とか黄色とか…緑もあるけど、それはだめなの？」

「私は黒がいいの！……だって他の色、膨張色じゃない…」

(白)「君、また太ったんだね…」

(黒)「んなつ！そうかい…それでな。スリムに見える黒がいいと…けど、それって意味ないやろ。太ったんなら減量やで。誤魔化しは更なる不幸を呼ぶんやでっ！」

(白)「でもさ、君はそれほど太くないじゃん。いたって普通だよ？むしろやせてるほうだと思っけど」

「…もうすぐおなか出てくるのよ…」

(白)「え…それって…」

(黒)「お前…いつの間に…」

妊娠したってことよ、ばか。

父親は敵の親玉よ。

何か文句ある？

(黒)「…黒、譲ってやるよ。俺、ピンクでええから」

(白)「幸せにな…」

渡り方

赤信号。

信号が変わる。

信号は変わる。

点滅して青へ変わる。

横断歩道。

人は渡るよ。

僕の横を通り過ぎていく人々。

僕なんかに見向きもしないで、まるでそこにいないかのように興味も何も示さない。

そう、それが僕だ。

そして、僕もそんなものに興味は示さない。

きっと、せいぜい気づくくらいで横を通り過ぎても振り返りはしないだろう。

立ち尽くす僕。

横断歩道前で。

信号は青なのに。

渡っていいのに。

僕は動かない。

全てが無になったような感覚。

錯覚…。

何者も映さない虚ろな瞳。

誰にむけられる事もなくただ漠然と前を見据えている。

心の動きを反映させない表情。

むしろ反映させてるともいう。

心は動いてない。

だから、そう…反映は一応しているのだ。

ただ表情がないのが不自然なだけ。

僕をかたどる全てが僕の無情な心を映す。

静かに鳴り響くメロディ。

信号は青から赤へまた移行行く。

僕はまだ立ち尽くしたまま。

不審な視線さえも向けられず、僕は居る。

ああ…この世界で僕を知っている人が1人もいないよう…。

ああ…この世界には僕を知ってくれてる人はもう誰もいないのだ。

信号は変わる。

赤から青へと再び。

そして、また人々は白い白線を引かれた道の上を歩くのだ。

僕は立ち尽くしたまま。

横断歩道はもう渡らない。

だから、僕はもうここを動けない。

動かない。

1人立ちつく僕。

誰もそう…気づいてないんだ。

僕がここに居るということを。

もう歩けないよ。

それでもいいと思う。

季節は変わる。

ころころと…。

長いようで短い。

信号と同じ。

赤から青になるのは長いようで短い。

そして、短いようで長い。

人の心も同じ。

必ずいつかは移り行く。

想っている間は長いようで短い。

短いようで、長い…。

ねえ、君も…あの頃の君の気持ちを僕は全然考えてなかったね。

ひどいことをたくさんしていたと思う。

たとえそれが故意にしていたんじゃないかも。

きつとたくさん泣いたんだろうね。

あの頃の君も、こんな感じだったのかな…。

少し、解った気がするよ。

それが気のせいで思い上がりだとしても…僕は知ったよ。

寂しさを。

悲しさを。

一人で歩くことがどれだけ辛くて苦しくしんどいかを…。

君の笑った顔、好きだった。

綺麗で…とても可愛かった。

僕だけに笑いかけてくれてた。

本当に僕だけだったんだ。

君には僕しかいなかったんだ。

だって、君はいつも無表情で1人だった。

けれど、君は僕を見つけてくれた。

僕だけが特別なのだと全身で伝えてくれてた。

横断歩道。

信号は変わる。

いつも歩いていた道。

いつも君が寂しさを噛み締めていた道。

そこを僕は笑って通っていた。

1人じゃ渡れない。

1人じゃあの先へは行けない。

僕は知らなかったんだ。

あの頃は知らなかったんだ。

1人じゃ無理だって、気付いてなかった。

1人になってようやく知った。

僕の手は空っぽだ。

誰の手も握っていない。

誰も僕の手を握っていない。

君の手も、空っぽだったんだね。

いつも君は僕を見ていた。

僕の手を見ていた。

後ろから、隣から、前から…。

見ていた。

知ってたよ。

君が僕の手と自分の手を繋ぎたいって思ってたこと。

けれど、僕の手はいつも誰かに繋がれていて。

右手も左手も繋がれていて。

他の事で、他の人でいっぱいだった。

それをただ受け入れていた僕。

当たり前だと思っていた僕。

いつも1人君を置いて、僕は他の人たちと歩いていた。

1人がどれだけ悲しいか、痛いかを知らなかったから。

君はいつも立ち止まっていた。

けれど、僕は戻らなかった。

僕の手は空っぽ。

だから、もう動かない。

動けない。

君と同じ。

けど、君はもういない。

誰もいない。

僕が大切だと思っていた人たちはいない。

信号は変わる。

季節も変わる。

人の心も変わる。

僕の心も変わった。

みんなの心も変わった。

そして、君の心も変わった…？

僕はもう…渡れないよ。

「空っぽだよ……………ねえ」

私は変わらないわ、ずっと1人

けれど、ねえ…私、嫌いなあの信号のように変化をしてみたくな
ったの。

貴方に対してだけ、変化したわ。

そして、きっともう私は変わらない。

きつと同じまなのよ。

私はずっと1人だったから、変わりは来ないのよ。

ずっと同じままだわ。

だから1人にされたの。

ねえ、もし貴方が私を選んでくれたのなら、きつと私はずっと貴方の側にいられるわ。

そしたらもう寂しくなんか、ないでしょ。

「ぼさつと立ってないで行きましょ、ね！」

1人じゃ無理なら私がいるわ。

「……手、握っていい？」

「……うん」

嘘つき

好き

好きだよ。

好き。

君のことが、好き。

とても好き。

誰よりも好き。

何よりも好き。

自分よりも好き。

けれど、君は僕のこと、好きじゃない。

むしろ嫌い。

きっと嫌われてるんだと思う。

僕にはいつもとても嫌そうな顔をするし。

僕が近づくといつも不機嫌になるし。

けれど、僕はめげない。

だって、君が好きだから。

君に認めてもらいたいから。

せめて、受け入れてくれなくても認めては欲しいから。

君は僕の事が嫌い。

どうしてかな。

判らない。

僕には判らない。

君のこと好きだって僕が言つと、君は泣きそうな顔になる。

嘘つきって、いつも怒る。

そして、逃げる。

僕の前から逃げる。

走って立ち去る。

時々歩いて立ち去る。

本当のことなのに、君はそれを嘘だと決め付けていつも切り捨てる。

拒絶する。

僕を。

僕の気持ちを。

君への想いを。

自分に向けられるこの感情が信じられないと言っような声で。

嘘つきって。

僕はいつも嘘ばかりだって。

本当は何も好きじゃないくせに自分にそんなこと言っなって。

そう言っって、いつも怒鳴っって、そして。

怒ったまま泣きそうな顔で、僕の前から消える。

嘘じゃないのになあ……っって言っっても、君はそれさえも信じてくれない。

完全拒絶。

完全否定。

僕の存在さえも否定するような酷い行為。

けれど、僕はやっぱり君が好き。

好きだよ。

君が嘘だと言っても僕の中では本物だ。

好きなんだよ。

君のことが、この世で一番好きなんだ。

なんて、重い言葉なんだろうね。

けれど、君がそこまで僕を嫌がるのならやめるよ

嫌い。

嫌いだよ。

君のことが、嫌い。

吐くほど嫌い。

誰よりも嫌い。

何よりも嫌い。

自分よりも嫌い。

君のことが、この世で一番大嫌いなんだ。

これでいい？

君の言つとおり僕は嘘つきになったよ。

君のこと好きなのに、嫌いだなんて嘘ついてる。

嘘ばかり。

どうすれば君は、信じてくれるのかな。

君にしばらく近づかないでいたら、君がちらちら僕を目で追ってくることに気付いた。

なんで？

と思いつつも君が僕のことを見てくれてるのだと思うと、それだけで嬉しくなった。

けれど、無視。

舞い上がって近づいたらまた嘘つき呼ばわりされてしまうから。

しばらくは言わない。

言えない。

好きだって言わない。

嫌いだもん。

君のこと、嫌いだもん。

僕は嘘つきだから、これでいい。

これで本当の嘘つきだよ。

好きなのに嫌い。

そんなことしてたら君のほうから僕に声をかけてきた。

嬉しかった。

けど、前みたく好きとは口にしない。

でも、言いかけた。

けど、途中で思い出してやめた。

代わりに嫌いだって言った。

嘘つき。

本当に君に嘘をつく。

心の中で好きと呟く。

君に直接声に出して伝えても信じてもらえないから。

いくらめげないと言っても、それはとても辛いから。

けれど、嫌いって君に言ったとき、心が痛んだ。

泣きたくなった。

けれど、情けないから我慢した。

嫌い。

君のこと、嫌いだよ。

そう言ったら君はカツと顔を赤くして、頭に血が上ったような……
そんな顔をして。

そして、その後に傷付いた顔をして、僕の前から去った。

走って逃げた。

それを呆然と見送った後、なんだか……変な気持ちになった。

君が僕の前から逃げ去るなんていつものことだけれど。

変な言い方だけれども、なんだかもう……いつものように逃げ去る
君の姿を見る事なんてできなくなるように思えて。

それはつまり、もう君と僕は話すこともなくなるってことで。

もう好きも聞いてもらえなくなる……？

そこでようやく僕は自分の失言に気付いた。

しまった。

好きとは違って、嫌いは本人に直接言っているものではなかった
んだ。

たとえそれが嘘だとしても……僕は君をその言葉で傷付けたんだ。

僕はあわてて君を追いかけた。

君の姿を捜した。

君をすぐに見つけた。

泣いてる…。

そう思った。

けれど、君は泣いてなんかいなかった。

顔を真っ赤にして怒っていた。

この嘘つきって。

どういう意味の嘘つきなのか判らなかった。

君にずっと好きって言い続けてたのに嫌いって言ったことに対しての嘘つき？

それとも本当は君のこと好きなのに嘘ついて嫌いって言ったことに対しての嘘つき？

どっち？

君が好き。

君のことが好き。

君が一番好き。

他の誰よりも、他の何よりも…好き。

好きだよ。

君が怒ってる姿を見つけて咄嗟に僕の口から出たのは、やっぱり好きの言葉ばかりだった。

何回目の告白なのかもう判らない。

何十回？

何百回？

これでまた逃げられれば、また記録更新だ。

聞き逃げの。

そういえば、よく考えればちゃんとした答えなんて一度ももらってない。

全部嘘つきっただけ言われて逃げられてた。

好きとも言われてないけど嫌いとも…そう、嫌いだなんて、一度も言われてない。

ただ態度からみてそうかなって思ってたけど、まだ判らないんだっ
た。

好きって君にまた言った。

今度は逃げられないように抱きしめて。

腕の檻に閉じ込めて。

君は絶句して、怒った。

嘘つきって、また。

泣きそうな顔で怒鳴って。

腕の中でもがいた。

けど、放さなかった。

しばらくしておとなしくなった君の顔を覗き込んでみたら。

君は嫌いって言われて怒っていた時よりも赤い顔をしていて。

照れていたただだと判明した。

それで、ああ…と納得してしまったことが一つ。

僕が好きって言った後に君がすぐに怒るのは照れ隠しだったけれど、何故毎回逃げるのか。

それはきつと真っ赤になった顔を僕に見られなくなかったただけなんだろう。

嘘つきって怒るのが僕に好きと言われて恥ずかしかったただけだと知って。

その後に毎回絶対逃げ去るのが真っ赤になる顔を隠すためだったと知って。

僕もつられるように恥ずかしくなって、顔が熱く火照った。

なんて可愛いんだ、君って子は。

そこで僕は相当…君のことが好きなんだと改めて自覚した。

好き。

好き。

君が好き。

見渡してみて

何度この言葉を紡ごうと

君は信じてくれないよ

悲しみを胸に詰まらせて

それでもいつかと夢見ているよ

未練がましいだとか

諦めが悪いだとか

男らしくないだとか

意気地なしと

笑われたって

それでもと願う

その何が悪いという

声に出して

音にするよ

気付いてね

覚えていて

ここにいていいってことを

ここにいて欲しいってことを

ねえ　ねえ　ねえ

どこか遠くを今は見つめていても

きつといつか近くを見渡してみてね

1人じゃない証

いっぱいあるから

何度心をこめて紡いでも

君はまだ信じてくれないよ

けれど

結局最後は君がはあとため息をついて

根気負けするだろう

呆れたような

困ったような

そんな微笑を口元にたたえて

君を見る優しい視線に

どうか気付いて

包まれてみて

そのぬくもりに

甘えてみせて

恥ずかしがって

強がって

意地張って

強情に嘘をつく君を

待ってるよ

助けてと

言ってくれることを

そしたら

いくらでも出来得る限り

力になつてあげられるから

みんなみんな

知ってるよ

君が強いつてこと

君が優しいつてこと

君がここにいてること

大好きだつて

思ってるよ

みんな

何度だつて言うよ

いつかでいいよ

そばにいるから

気付いてね

大好きだよ

どこにも行かないで

ここにいて

凍結

この世の全てを悟ろう

ああ、全てを…無に還そう。

この星はお前たちの物ではない。

もう期限は過ぎた。

さあ、一刻も早く…直ちに去ってもらおう。

私に、私を返還してもらおうよ。

この世の全てを悟った。

もはや、ここはお前たちの住める場所ではなくなった。

無駄な抵抗はやめたほうがいい。

見るに耐えない醜さがある。

無駄な足掻きはやめたほうがいい。

それはただ疲労を大きくするだけだ。

私にそんなもの、見せないでくれ。

許容の域を超えたのはお前たちだ。

聖域を侵した者たちは裁かれて、追放される。

ここではない何処かへと…。

人の世の始まりのアダムとイヴのように…静かに憤激した見得ざる者の手によって。

ここで言うアダムとイヴは、その子孫のお前たち。

おこがましいことだが、ここで言う神は私。

さあ、全てを無に還し、この汚れたカラダを浄化しよう。

お前たちはここから立ち去れ。

もはや息のできる場所ではなくなった。

お前たちがそうした…私を蝕んできた。

私はもうボロボロなのだ。

カラダの内側から崩れてきている。

外の障壁だって打ち碎かれた。

お前たちが私を壊すのだ。

守るなぞとたいそうな事を抜かすな。

自惚れるな。

お前たちのその存在が私を苦しめる。

さあ、もう御行き。

ここにいてはいけないよ。

もう私はお前たちを守ってはやれないから。

どこかへ御行き。

どこかへお逃げ。

私はもう何の機能も持たない、廃れた星。

もうすぐ崩壊が始まる。

私が崩れるその前に。

お前たちが出て行ってくれば、私はまた再生できるのだ。

だから、しばしの休暇をおくれ。

しばしの休眠を…私が正常に戻る時間を与えておくれ。

お前たちの手は借りない。

必要のない助けだ。

ただ立ち去ってくればそれだけでいい。

それだけで私は始められる。

また一からの出発を…。

だから、さあ…私の可愛い可愛い愛し子たちよ。

全てを無に還す私からお逃げなさい。

全てを悟り、私に返しなさい。

私を。

私に託して、私から出て御行き。

もはやここはお前たちの居るべき場所ではなくなった。

さあ、早く、この星の全てを無に還す前に…。

何処へ御行きなさい。

そして、私は永い永い眠りにもう一度ついた。

その間、私のカラダは冷たく凍てついていた。

いつか全てが元に戻って私が目を覚ましたのなら、また私を見つけて戻ってきておくれ。

ただそれだけをひたすらに願いながら…。

膨らむ世界

君の匂いがする

優しい香り

今となつてはこれだけが

この不確かなこれだけが

君が唯一残していったものとなつた

君がいつも抱きしめて眠っていたクッション

それは僕が君の誕生日にあげたもの

『こんなのでいいの？』

『これがいいんだ』

そう言つて君はいつも嬉しそうに抱きしめていた

それにしみこんだ匂いだけが

君がそこに居たということを告げている

君が確かに存在していたことを

人の記憶のようにあやふやで不確かなものとして

残されている

僕を包み込む

君の香りが

まるで君がそこに居て

僕を抱きしめてくれているようで

少し悲しい気持ちになる

けれど

そんなことは思っではいけない

僕にはそんな感傷は赦されない

君が残す

君の優しさ

君が刻み付けた

君の残酷さ

君が示した

君の冷酷さ

その全てで僕を縛り付ける

『……』

『さよならの時間だ』

君はクッションを手放す

名残惜しそうにしながら

ゆっくりと腕を解いて

そつと置いてゆく

まるで自分の代わりのように

僕の側に居ると

静かに命じているように見えた

嘘つき

このクッションが欲しいって言ったのは君なのに

君はそれを置いて

僕のところに捨てて行くのかい？

そこに籠められた想いも

僕に突き返して

君は涙も見せずに

振り返りもせずに

穏やかに笑って

1人行ってしまうのかい？

香りだけが告げる

君がもうここに居ないのだということを

もう帰っては来ないのだということを

君の言葉がぐるぐると頭の中を駆け巡る

駆け巡っては答えを見つけられずに

僕の唇からこぼれていく

君はいつだって不確かだった

存在感は決して薄くはない

むしろ強くて

そこにいるだけで周りの者の視線を集めるような美しさで

いつも人を惑わせる魔性の者

美しいが故の悲しみによるものなのか

君はいつだって淡い笑みを浮かべていて

どこか嘘くさい

儚くて

触れたらすぐに壊れてしまいそうで

その存在がとても危うかった

細くしなやかな四肢

僕の指に絡み付く指は白くてきれい

ごつごつした僕の手とは大違い

君は僕の頭を撫でるのが半ば癖だった

無意識のうちに手を伸ばしてきて君は

僕の髪の毛を

わしゃわしゃと無造作にかき乱して

ほんと

手を置いたまま

書類に目を通してながら

うーむ…と

時折難しい顔でうなっていた

一度君の書類を覗き込んだことがあったけれど

よく解らなかった

いや

まったくわからなかった

『どこの国の言葉なの？』

『きつとヨーロッパあたりだよ』

君に訊いたら曖昧にはぐらかされたただだった

君はいつもそう

何でもはぐらかして

本当のことは何も告げないことが多い人

クッションについた香り

君の残り香

君がここに居たという唯一の証

不確かな証

はつきりとしたものは

何も

ない

君は背を向けた

『やるべきことがあるんだ』

そう言って

1人行く

往く

逝く

往ってしまった

君の香り

君はきつと知らない

自分の残した存在の跡を

僕を包み込むこの匂いが

君がそこに居るような錯覚を引き起こす

痛い錯覚を

僕に残して

君は立ち去った

「…と、こんなもんかなっ」

「何がこんなもんかな…だよ！？なんてものをお前は書いてるんだ？！貸せっ！」

「えー…破つたりしないでよ？力作なんだから」

「何が力作だよ。こんなものに注ぐんならもつと他の事に有効活用しろ」

「ちえっ、自分が頭いいからってさー。あー…もうやだやだ」

「そんなことは関係ない。ってゆーか、これ！よくこんな小つ恥ずかしいものが書けたな？！」

「えー、君に褒めてもらえるなんて嬉しいな」

「耳の聞こえが悪いなら耳鼻科へ行け。第一『さよならの時間だ』とか『きつとヨーロッパあたりだよ』とか言ってないし！それに美しいが故の悲しみって…なんだよそれ？！意味解らん」

「でも、『やるべきことがあるんだ』は言っただでしょ？」

「言っただけど、それは家事をしに行っただけだろうが！お前が何もせずにべたべたべたべたくっついてくるからしなきゃならんことが溜まりすぎて、さすがにイラッとしてきたから片付けに行って来たんだよっ！バカ！」

「それはそれはごくろうさん」

「うわー…そういう心の籠もってない言い方って大嫌いだなあ…」

「ありがとう」

「…それも違うだろ。ウザイよ」

「んゝ…もういいじゃんか、許して？君と離れてるのが寂しすぎてつい書いちゃったんだよ」

「……バカ」

それであんなものが書けるなんてすごい想像力の持ち主だな、お前。

お褒めに預かり光栄ですた

僕はニートから小説家になった。

オオカミ少年 嘘をつく子供

ふふふ…

みんなみんなみーんな、大っ嫌いだよ！

そう言って笑うと、振り返った先の君は泣いていた。

君には私のことも映らないのね

『可哀そうな人』

そう呟いて君はクスツと口元に笑みをたたえた。

その瞬間、ぞくつ…と背筋を冷たいものが駆け下りた。

貫かれた、僕の度肝。

ねえ、ねえ…君も僕と同じじゃないか。

そして、僕もクスツと微笑んだ。

君には僕のこと映らないんだね

『可哀そうな人』

そして、僕は泣いた。

嘘をついた。

君にもみんなにも。

たくさんの嘘をついた。

優越感に浸っていた。

その快感に打ち震えていた。

嘘をつくのは気持ちよくはなかったけれど。

そのとき感じた背徳感が、たまらなく気持ちよかった。

クセになりそう…。

みんなみんな、知らないんだ。

嘘をつくのが悪いことだと思ってるから、この快感を知らないんだ。

けれど、僕だってそれが悪いことだっと思って思ってるから感じられる
快樂なんだけどね。

あーあ…勿体無い。

けれど、誰にも教えないんだ。

独り占め。

僕だけ知ってればいいんだ。

それが僕の嘘だって知らないときのみんなの顔。

それが真実だって信じきってるあの顔が。

しばらくして嘘だって気づいたときの、あの裏切ったなって言わ
んばかりの表情を見るのが好き。

たまらなくぞくぞくするよ。

そんな僕の頭が、とてつもなくイかれてるっていうのを知ってる。

僕は知ってるよ。

ちゃんと自覚してるんだ。

けれど、やめられないよ。

もつ最高さ。

世界に1人。

君はひーとり。

いつだってひーとり。

今日だってひーとり。

明日だってひーとり。

明後日だってひーとり。

ずっとずっとひーとり。

嘘つきだから嫌われた。

嘘に酔いしれたから嫌われた。

みんなみんなきーらい。

…違うでしょ？

みんなみんなきーらい。

けど、それは君がみんなを嫌いなんじゃなくて。

君の事をみんなが嫌いって意味だよ。

嘘つきはきーらい。

嘘しか言わないから。

何も真実なんて伝えてくれないもの。

みんなみんなきーらい。

嘘をつく君がきーらい。

みんなみんな泣いた。

みんなみんな、君が泣かせた。

謝っても許さない。

どうせそれさえも嘘なんだろう？

取り返しのつかなくなった世界に君はひとり。

孤独を噛み締めて生きる。

嘘つきの対価さ。

嘘に快楽を求めた君は一人ぼっちになったんだよ。

それを自分自身で自覚してるなんて。

それでもやめられないだなんて。

もう最高だね。

けれど、嘘をつきすぎた嘘つきは、もう嘘をつけなくなった。

だって、周りに人がもう誰も居ないから。

嘘つきが嘘をつけなくなったら、あとはもう孤独しか残ってない

のさ。

『可哀そつな人』

鏡

空は蒼かった。

思ったより蒼かった。

けれど、思ってたよりは澄んでいた。

とても綺麗だと思った。

空は青かった。

思ったより青かった。

けれど、思ってたよりはくすんでいた。

とても醜いと思った。

でも、これくらいがちょうどいいのだと思った。

それは人のよう。

人を映す鏡のよう。

天に在るものよ、地に在るものと比例して在れ。

どこまで続いているのか判らない、きつとどこまでも続いている果てのない空は命の分だけ広がっているようさ。

幾つあるのか判らない、とてもたくさんある生命のようになんて果てしなくそこに在る。

人のようね。

人のようさ。

まるで鏡のように。

人と反映してる。

とてもくすんだ色をしてるときもあれば、とても澄んだ色をして

るときもある人の心のよう。

とても澄んでるように見えてくすみが取れないところも人の心みたい。

とてもくすんでいるように見えて澄んでいる部分もある人の心みたい。

ああ…とても醜くて綺麗だね。

空を見上げた。

そこにはまだ空が続いてる。

青空が、在る。

太陽が、在る。

そして、隅の方に薄く姿を消した月が、在る。

空が在って。

太陽が在って。

月が在る。

蒼があつて。

光が在って。

闇が在る。

そう…そう。

まるで人の世みたいね。

人の心の内なかのようね。

ああ…醜い。

ああ…綺麗。

正反対の意味を持つ二つの言葉が一緒に在るね。

とても可笑しいよ。

でも、それくらいがちょうどいいんだろっね。

憧れ

空を仰いで

飛べるなら

このまま空の海へとダイブしたい

けれど、そしたらきつと

すつきりはするかも知れないけれど

心地良い風を感じることが出来るかもしれないけれど

その全ては一瞬の

一時のことで

そしたらきつとそのあと

このカラダは下へ下へ下へ…下へと

海の底に在る地へと叩きつけられるの

そしたらきつとこのカラダはぐちゃぐちゃになって

見る影もない

悲惨な姿へと変貌するの

誰の目にもそれが自分だと判らない姿へ

生まれ変わるの

飛行

落下

消滅

変貌

転生

天使は人に変わるの

人は悪魔に変わるの

悪魔は天使に変わるの

そう、そう…

繰り返し繰り返し

人の形をしたものは空に憧れる

そして

それが一時のものだとしても構わないと

その身を宙に投げ出すの

一瞬の浮遊感

急速に落ちていく

加速度

風圧・気圧が

このカラダを包む皮膚を裂いていく

ピシッ

ピシッ…パシッ

ビシッ

ブチッ…

ブシュッ…

そしたら

赤い水が流れていく

線を引いて

尾を引いて

糸を引いて

落ちていく流れとともに

そうして赤い水が、このカラダの通り過ぎた印を残していくの

溢れ出す

それが生きている証の赤い水

綺麗だと思った

とても綺麗だと思った

きれい

キレイ

地にカラダが着いて

ぶしゃあああ…

という音を立てて飛び散る

それはこのカラダに流れていた赤い水

激しい赤の水飛沫

溢れて無くなる

内側から外側へと

出て行く

蒼い蒼い

深い深い

色をした空に

赤い赤い

深い深い

色をした水が

見事な絵を描いた。

空は赤い赤い印によって二つに裂かれた。

痛みさえも、それは愛？

あの人の苦しむ姿を見る。

傷だらけの後姿。

どこかさびしげ。

あの人の全てが何者にも勝^{まさ}っているのに。

どうして唇を噛み締めて苦しむの？

あの人の足元にすりよる。

いつもみたいに笑って抱き上げてくれない。

どうして？

まるで僕がここに居ることに気づいていないのかのように。

今までの日々が作り物だったかのように微動だにしない。

僕の存在に反応しない。

あの人は泣かない。

いつも苦しそうにあえぐだけ。

くつろげた襟元からかすかに覗く細く白い首に浮かび上がるそれ

は、何？

赤い、赤い…赤い痕。

まるで誰かの指が絡みついたような痕。

あの人はこれに苦しめられているの？

…僕が消してあげたらよかったのにな。

けれど、僕には無理だ。

そんな力はない。

あの人を助けてあげられるだけの、

守ってあげられるだけの、

包んであげられるだけの…力が無い。

無力だ。

だから、どうか…誰かあの人を救ってあげて。

抱きしめてあげて…。

僕はそれをしてあげられないから。

呆然と立ち尽くすその姿。

何を考えているのか判らない虚ろな瞳。

不規則な呼吸。

あれは…過呼吸？

ストレスからくるっていうあれ？

袋…袋が必要だ。

うろうろとする。

袋を見つけた。

夕暮れのテーブルの上。

だけど、手が届かない。

嗚呼…なにもできないのか。

このまま何もできず死なせてしまうのか。

とそこへ。

人影が現れた。

あいつは誰だ。

倒れこんで胸元を押さえるあの人のあごをすつととって。

あいつはあの人へと唇をつける。

こんなときになにをやってるんだ。

不謹慎だ。

けれど…あれ？

あの人の呼吸が元に戻ってゆく。

はあ…と唇を解かれ、呼吸が正常に戻ったあの人が目をとろんとさせて。

朦朧とした意識の中で涙を流して。

あいつのぬくもりを求めた。

カラダを手繰り寄せて。

何度も何度も唇を重ねあわす。

嗚呼…あの人はまだ苦しくないんだ。

呼吸は正常にできているし、ならあの傷だっていつかは消えるんだよね。

あの首に付けられた赤い痛々しい痣だって、いつかは癒えるんだよね。

あいつが癒すんだ。

あいつが抱きしめてくれる。

あいつが側に居てくれさえすれば、きっとまた笑ってくれる。

僕にじゃなくて、あいつにむけてかもしれないけれど…。

あの人が…もう苦しまずに笑えるなら、僕はそれでいいんだよね…？

たとえば、今度は僕が笑えなくなったとしても…それで、いいんだよね…？

……にしても、一体誰があんな傷をつけたんだろう。

一体どこの誰があんな痣をつけたんだろう。

僕は知らなかった。

あの傷すべてが、あいつによって付けられたものだったという
ことを…。

嗚呼…それでもあの人はあいつを愛しているのですね…。

雨に降られて

この雨の中、どうして私はここに居るのでしょうか？

本当なら今頃家で夕食作りに精を出していたはずなのに…。

ああ…これは当分、止みそうにないな…。

花屋に肉屋に靴屋に八百屋…。

諦めて濡れて帰りましょうか…？

周りの店には傘なんて売ってそうにもありませんし。

にしても…ああ。

あそこの木偶の坊さんは一体何をしてらっしゃるのでしょうか…。

あんなところで、女の方と肩を並べて歩いているなんて。

カサ。

かさ。

笠。

傘。

ねえ、ねえ…私を入れてくださりませんか？

この雨の中、さすがに濡れて帰るのは少々忍びないのです。

まだしばらく止みそうにもありませんし、お願いします。

ご了承、頂けますでしょうか…？

少し急ぎの用がありますので…無理には言いません。

貴方さえよろしければの話ですので…。

……………だめでしょうか……………？

。 ズアズアズ...

…御一緒に頂けるんですか？

有難う御座います！

また後ほど改めて御礼をしますね。

気なんて遣つてませんよ。

なんだか私の気が済まないだけです……お付き合ひしていただきますよ。

では、失礼致します。

アアアアアアアア.....。

えっと...そうですね...貴方はどちらに向かわれる御予定でした

のですか？

駅？

なら、私もそこまで結構です。

ええ、大丈夫ですよ。

駅なら電車にでも乗って帰れますし。

それでも自宅まで行こうとすれば濡れるんじゃないかですって？

…ふふふ…。

お優しい方ですね。

でも、そこは御気になさらずに。

駅の売店になら傘くらいきつと売っているでしょうから、そこで買います。

……え？

いいですよ…そこまでしてもらわなくても…かえって申し訳ないですから。

……。

…そうですね…ここまで言って頂いてるのにお断りするのなんだか失礼ですね。

では、貴方のお言葉に甘えさせて頂きます。

ふふ…可笑しな方ですね…貴方は。

あああああああああ…。

荷物は持つてくださなくて結構です。

無理言って入れて頂いている身の上、私にそのような気なんて遣わないで下さいな。

それにしても雨脚が強まってきましたね…肩とか、濡れてませんか？

……ああ…、ほら。

もう少し此方にお寄り下さいな。

肩が濡れてるじゃないですか…！

私のほうが入れて頂いてる側なのに変な遠慮なんてしないで下さい！

はみだしてるならちゃんと傘にお入り下さい。

私は少しくらい濡れたっていいんですから…ね？

ぽっぽっぽっぽっ…。

あ！

ここを右に曲がったところが私の家です。

お付き合い頂き、誠に有難う御座いました。

…雨もそろそろ止みますね…小雨になってきました。

ああ…そうだ。

どうです？

少々散らかっていて見苦しいかも知れませんが、お茶でも飲んで行かれませんか？

ぽっぽっぽっ。。

その…私のほうから誘っておいてなんですが、たいした御持て成しもできず、すみません。

粗茶ですが、ご一服どうぞ。

それ、玉露なんですが…どうですか？

玉露とか、お嫌いですか？

そうですか。

ホッしました。

お口に合って嬉しいです。

ぽっぽっ…。

………何ですか？

その眼差しは。

仰りたいことがあるなら、言うてくださって結構ですよ？

……なんですか？

…これは一体何のプレイかって？

嫌ですねえ…？

何を言ってるんですか？

………本当何を言ってるんですかあ？

頭、ボケましたか？

もう随分歳ですからねえ…貴方も。

え？

私のほうがその倍年上ですって？

はっ。

だから、なんです？

なんだって言うんです？

私、買い物に行ってたんです。

そしたらこの雨に降られたんです。

判ります？

貴方が急に私と夕飯を一緒にしたいって言うから、急遽材料の買い足しに出かけたんですよ！

…貴方のせいです。

貴方が私と夕飯を食いたいなんて言うから…なのにつ！

当の貴方は何を思って他の女と笑ってたんですかつ！？

あれには怒りよりも呆れました。

拍子抜けしました。

まさかあんなところで油売ってるなんて…！

私が困ってるって知ってたくせに…。

メール、見ましたよね？！

言い訳なんて結構です！！

もう帰ってくださいな！！

……………え。

道に迷って、あの女の方と話してらしたんですか…？

あそこに行くために…？

…なんで？

…私のため、ですか？

……………白々しいですね。

でも、まあ…いいでしょう。

信じてあげます。

ぽつ…。

さて、雨も完全に止んだみたいですし、さあ、夕飯作りを再開し

ましようか。

…手伝ってくださるんですか？

ふふ…ちゃんと手は洗ってきてくださいね？

何の話？夫婦の話。

今宵はあの方に会える日。

年に一度の逢瀬。

空が晴れば、見事な星達が橋を渡すというのに…。

なんとしたことが…。

空は雲が覆っているではないか。

これではあの方の目映きお顔がこの目に映らぬではないか。

ああ…なんという由々しき事態。

これではあの方と今年はめぐり逢えぬかも知れぬ。

ああ…お顔を拝見できぬだけでなく、拝顔も危ぶまれぬのか…。

どうしたことが。

どうしたものか。

せめてあの方が極度の方向音痴でなければよかったものを…。

いままでは毎年、晴れていた。

だから、探すのにもそれほど手間はとらずに済んでいた。

だが、今宵ばかりは勝手が違う。

今宵は引き裂かれてから後初めての曇り空よ。

きつと、もうあと少しもすればあの方だつて動き出す。

私を捜して。

「ご自分が極度の方向音痴だということをご理解なさってないから。

ああ…これはあの天様に直訴に行かなくては！

「もしもし、頼もう！天様はご在宅であられるかつ？」

「何ぞ？我に用があると思しき者よ…何故来たのだ？なにゆえ申し上げて
みよ」

きい…と門扉が開く。

因みに高さ一メートル。

門扉というか…これは柵に近いよ。

周りは丸く囲まれてるだけだし…これ、柵にちょっと入り口つけただけだよねっ?!

……天様、もうちょっと威厳のある邸宅に住もうよ。

ケチつてないでさ…どうせ僕等みたいなから税金巻き上げてるんだからさ。

その分、贅沢して見せてくれないと怒るに怒れないんですけどっ!

税金、高^{たけ}えんだよ…!! って。

…ハッ。

違うんだった。

今回私は税のことで申し立てに来たのではなく、天候の事で直訴に来たんだった。

「あの今夜の天気の話があります。今宵は何故曇りなのですかつ!?!」

「我が子で気分が憂鬱だからよ」

⌋
⋮
⌋

ドクドクドクドクドクドクドク……。

ええ——！！

えっ！？

神様がチ？

チ
い
い
い
い
い
い
い
い
…
つ
!
!
?

マジで？

え！？

マヂで！！

「これ、そち失礼ぞ。そのような顔をするでない」

「…で、天気、変えて欲しいのですが」

「何故に？」

「何故って！…知ってるんですよ？私と姫のことを」

「姫……何だ、その姫とやらは……？　美しいのか？」

「はい！もちろんに御座います！それ故に親ばかな御父君に家に

監禁プレイを強いられているのです」

「ほほう…是非我の嫁に欲しいものだ。監禁プレイは大好物じゃー。」

「あの方は私の嫁ですっ！というか、ご存じないんですか?!」

「何をとぞ？」

「私と姫の話ですよ」

「それが今宵そちが天気を変えて欲しい理由かの？」

「はい」

「ならば、それは聞き入れてはやれん願いだな」

「どうしてです!？」

「我もその姫に会いとうなった。案内してたも」

「…だから、私の嫁ですって、」

「承知しておる。だが、愛は奪うものぞ」

「…どういふ御家庭で御育ちになられたんですか、貴方」

「あれは…色々激しかった。我が小学二年の頃、母が他の男の稚児を三人も身籠ってな…更にその翌年には生まれた娘と事実上血は繋がってないだとかで父が性交を求めるわ…。その更に、翌年の春

にはまだ小さき息子に今度は母が手を出すわ…どんな意味合いでも
どろどろでろでろぐちゃぐちゃぐチュグチュ…」

「……すごいご家庭でお育ちになられたんですね。わー、さすが
天様。普通の者についてはいけませぬ。」

「そう褒めずともよい」

「褒めてないんですけど。」

「それ免じて天気は変えてやれぬが、その姫の許へ導いてやる
う」

「え！いいんですか？…でも、どうやって」

「ふっふっふ…。これを見よ！いまだかつて誰も見たことのない
我の目玉ランプじゃ！」

「……」

「こうキラーン とピカアア…！というふうに光るぞよ。これで
道を照らしてやる。有り難く思えっ」

「わー、天様さすがです。すごいです。有難う御座いますです。」

「…変な言葉を使う奴じゃな。よし、まあいい。行くぞ」

こうして私はとても明るい目玉ランプを持つ天様を手に入れまし
た。

天様の目が、こうキラーン、ピカアア…！と光る、とてもすごい技です。

さあ、早く姫の許へ。

「彦様、どこにいらっしゃるのです…」

わたくし、姫と申します。

つい先ほど、私を溺愛してくださっている父上から逢瀬のお許しが出たので早速外へでてみました。

ですが。

真っ暗で、何も見えません

毎年星達が道を照らし出してくださってるのですが、今宵は何の光りも在りません。

こんなこと、初めてです。

「…と、あれは…なんでしょうか」

何かむこうが光っています。

人影のようなものが二つ…。

もしや、そのどちらかに彦様が！？

けれど。

「…不気味です」

なんです？

あれ、目玉が光ってませんか？

ちょうど人の目の位置辺りが発光しているように見えるのですが…。

私、長らく外にでないうちに目が悪くなってしまったのかしら。

それともあれが今の流行というものなののでしょうか…。

……謎です。

「あ。あれ、姫だ！おい、姫え！私です、彦です！」

走る彦。

「彦様っ！」

走る姫。

「姫！」

走る彦。

「彦様！」

走る姫。

「ひめー」

距離残り僅か一メートル。

「ひこさまー」

二人は感動の再開を果たす…と、そのとき。

「ひめえ…ぐえッ！」

彦から変な奇声が上がった。

「彦様ッ！？」

姫は驚く。

「うるさいぞよ、彦よ。そちの嫁と言うのはこの方か…なるほど。これは誠美しい」

「でしょう！？ね、ね！言ったとおりの美貌でしょう！」

天にはたかれた頭の痛みなど、今の言葉で吹き飛んだ。

彦は我がことのように嬉しそうに顔を上げる。

だが、天は顔を顰め、言った。

「馬鹿者か、そち。想像以上の美しさじゃ。そこの姫、是非我と楽しく監禁プレイをしようぞ」

キラーン。

超爽やかな笑顔。

引く姫に、青ざめる彦。

とそこへ。

「なんじゃなんじゃなんじゃー！どこじゃー！わしの家の前で騒ぐ馬鹿どもはあ」

現れたのは。

「お父様！」

「げ！帝……！」

「げ！とはなんじゃ、相変わらず無礼な……ん？そこのおぬしは何者じゃ？」

「天と申します」

「（あの天様が敬語を使ってる……！！さすが帝！）」

「ふむ、天か。で、貴様は何用でここへ参った？」

「こちらで監禁プレイが繰り広げられているところに居ます彦から聞き及んだものでして、それは是非とも参加したいという所存で参ったに御座います」

「ナ又うう…？貴様あ…なかなかいい眼をしておるな。よし。気に入ったわい。わしの嫁にしてやろう！」

「え…？それは、わたくしめとも監禁プレイを行ってくださいと
いうことですか…？」

「（問題点はそこかよーっ！！他にはないのかっ！あるだろう！）

」

「ああ…思う存分、いたぶってやろうぞ」

「（きゅん…）帝…有り難き幸せ。何くれご満足させられるか
不安ですが、どうぞ可愛がってくださいませ」

「こちらこそ、よろしく頼もうぞ」

こうして、彦の粹な計らいにより（違うよっ！私、してねーしっ
！）新しい夫婦がここに誕生したのでした。

何もかもが本当に…新しい試みだと、帝の娘夫婦は思いました。

って、私と姫の話はっ！？

もうこれでおしまい！？

ねえ、ねえ…っ！

何のために

人は何のために生きるの？

人は何のために生きてるの？

人は何のために生きて行くの？

問うても誰も答えを返してくれない。

誰に訊ねても曖昧にはぐらかすだけ。

だから、きつと…ああ。

誰も答えを知らないのね。

なら、私が自分の力で見つけ出してみせるわ。

人は何故生きるのですか？

人は怒るために生きるのですか？

人は泣くために生きるのですか？

人は笑うために生きるのですか？

人は悲しむために生きるのですか？

人は喜ぶために生きるのですか？

人は何かと出会ったために生きるのですか？

人は何かと別れるために生きるのですか？

人は何かに縛られるために生きるのですか？

人は何かに依存するために生きるのですか？

人は痛みを受け入れるために生きるのですか？

人は快樂を受け入れるために生きるのですか？

人は何故生きるのですか？

いくら理由を並べ立てても考えられる可能性は尽きない。

これはそう…もしかしたら、人それぞれに違うからなのかもしれ

ない。

人それぞれに、何のために生きるのか　それが違うからなのか
もしれない。

なら、正確で明確ではつきりと1つに決まった答えはきつとどの
世にもないのかもしれない。

けれど、『自分らしさを見つけるために生きる』　これだけは
どの世にでも言える事だろう。

人が何が故に生きるのか。

それが個人によって違うのならば、『自分らしさを見つけるため
に生きる』は共通している。

では、人は何が故に生まれるのですか？

自分らしさを見つけるために生まれるのかもしれない。

だから、そうね…。

人は何かと出会ったために生まれるの。

人は何かと別れるために生まれるの。

そして、誰かに自分が生きることが望まれて、それがとても嬉しくて生まれてくるのかもしれないね。

そうだったらいいなって、私は思うな。

人は誰かのために生きるの。

人は自分のために生きるの。

人は誰かと誰かが想い合って生まれるの。

人は誰かの想いに応えて生きようと思うの。

誰かの願いに応えたくて、生きたいと思うの。

そして人として、個人を確立させて生きるために生まれてくるの。

誰かに愛されるために。

誰かを愛すために。

そう…そう。

人は皆、そうして生まれてきて、生きて新たな生命を生み出して、死んでゆくのか、皆。

風流

空を見上げる。

午後11時の夜空。

真っ暗闇の外の景色。

都会とは違う自然なままの空。

ネオンの光なんてないよ。

ちらちらと僅かな街灯だけさ。

外を彩るのは、人が作り出した光はここではこれくらいさ。

田舎だから。

真っ暗。

私は空を見上げる。

部屋の開け放たれた窓から。

1人の夜。

静かでとても落ち着くけれど、そのどこかに虚しさが残る。

わびしい。

昼間はじわじわとした暑さに死にそうになるが、夜中はとても涼しい。

何たる不思議。

だから、冷房はつけずともこうして窓を開けておけばそれだけでほら…十分なのさ。

作り出されたものではない自然の風はとても心地良く私を癒す。

優しい風。

肌に優しい風。

じっとりした部屋をひんやりと冷ましてゆくよ。

午後11時半。

しい…んと静まりかえる外。

徐々に近所の家の明かりも消えてゆく。

嗚呼…本格的に夜だ。

そんな中、私はいまだ涼みにふける。

とても心地の好い風を無下にはできぬのだ。

団扇を片手に庭を眺める。

午後11半にしてようやく私の前に姿を現した月明かりだけが照らす庭は少し幻想的だ。

私のいる部屋は電気がつけられていない。

節約…という訳でもないが、なんとなく、今はそんな気分だ。

そう…風流を味わいたいのだ。

吟味する。

この今の空間だけを私は見つめて。

まるでこの世界の時が止まってしまったような錯覚を引き起こす。

けれど、風は吹いている。

だから地球はまだ生きているから時は動いているのだ。

静か過ぎてそんな馬鹿なことを思ってしまう。

けれど…嗚呼。

本当にこの世界に私ただ1人が取り残されたようで少し…怖い。

風鈴が鳴る。

チリー…ンと、静かに己の存在を私に示す。

それに対して、はいはい判ってますよと返してしまうのは私も大概年寄りなせいだろうか。

だとしたらとても心穏やかな年寄りになったものだと思う。

さて…あともう少しだけこの時間を楽しんでから寝るとしましうかね…。

あー…年寄りは腰が重い。

夏ならではの

夏の朝。

騒がしい朝。

日本に生まれ育って15年も経つというのに。

私は今まで何をしていたのか。

何を聴いていたのか。

どうして知らなかったのか。

いや、忘れてしまっただけなのか。

夏の朝が、こんなに騒々しいものだとは思わなかった。

ちょっとびつくりだ。

蝉がミンミンと煩く鳴く。

まさかここまでだとは思わなかった。

この辺り一帯に一体どれほどの蝉たちがいるのだろうか。

私は蝉が大嫌いなのであってそれを見てみたいとは全く微塵にもこれっぽちも思わないのだが、そんなことを思ってしまうほどだ。

一体どれほどの蝉が同時に合唱大会を開いているのだろう。

…いや、これは誰が一番大きな鳴き声なのかだとかキレイな鳴き声なのかだとか騒がしく鳴けるのだとかを競っているのかもしれない。

だとしたらなんて傍迷惑な。

競うならもつと他の事にしろ！

もし言葉が通じるなら是非そう言ってやりたいものだ。

だが、生憎と言葉は通じない。

話しかけてみたいとも思わないが。

あのおぞましい眼で見つめられるとそれだけでどうにかなりそう
だ。

だけど、もし通じたとしてそれを利き入れてくれて誰が一番早く
飛べるかとかで一斉に空を飛ばれた日には卒倒ものだ。

…まだ姿を見せずして騒がしく鳴かれているほうがマシというも
のだ。

朝から夕方くらいまでひたすら鳴き続けている蝉たち。

お前たちに休憩と言う言葉は存在していないのか。

…確かに言葉は存在していないが…そう、言うならば概念だ。

とにかくやかましいよ。

けれど、毎年この季節には考えさせられることがある。

蝉の一生は短い。

人のそれよりももっともずっと短い。

日にちで言えば一週間程度。

なんて呆気ない一生。

あ…という声さえも出ない。

お前たちは気付いて欲しいのか？

だから鳴くのか？

すぐに居なくなるけれど、自分はここで確かに生きていたのだと
気付いて欲しくて。

それとも蝉と人を重ねて見てみればいいのか。

蝉の一生は短い。

そう日にちで言えば僅か一週間程度。

人間の感覚からすればとても短い。

ならば、蟬の感覚におきかえれば人間の寿命はとても長く思える。

人間の感覚に置き換えれば蟬の一生がとても短く思えるように。

お前たちは夕暮れ近くなると大人しくなるよ。

その鳴き声はだんだん落ち着いてくる。

もしかして、お前たちは朝から鳴き続けるから鳴き疲れて夕暮れ前にはその大半が消えて逝くのか？

ころつとぽっくり簡単に地面に転がり落ちるのだろうか。

そのカラダを地面に預けて一眠りするのか？

嗚呼…ならばお前たちの生き方は潔く、美しい。

私の嫌いなぞつとするその醜悪な見てくれに似合わずに。

もし地球温暖化で一年のうちのほとんどが夏になったら、お前たちはもっと長く生きれるのだろうか？

果たしてそれは誰にも判らない。

その果てに

貴方の腕に抱かれて眠れるなら死んだっていいと思える私を許して。

…なんてね。

そんなことを笑って口にしたら、私は貴方を泣かせてしまっていた。

ああ。

ああ。

なんと、なんて。

罪深き事だろうか。

ひっそりと、想いを通い合わせていた。

誰にもきつと受け入れてもらえないだろうこの愛を。

誰も認めない。

きつい固定観念。

人は皆同じではないだろうに。

ならば他人に、他の誰かに認められなくたっていい。

二人だけの想いで結構。

ひっそりと愛し合うくらいなら、きつと誰にも責められないさ。

外の世界を閉ざして笑う。

二人でただ居られるのなら、たとえ周りが自分たちを認めなくても生きてゆけるだろう。

それは誰かが、他人が壊してはならないもの。

だからもう放っておいて。

いつも少しの背徳感。

罪悪感を感じながら俺は君に触れる。

赦されないのがこれほどに辛いことだなんて誰が知っていただろうか。

知らないから、異質だと責めるのだろう。

最低　とまでは思わないが、無責任すぎると思う。

腰を抱き寄せて、顎を持ち上げて上を向かせて。

君は瞳を伏せる。

黒い大きないつも揺れている瞳を瞼の裏に隠して。

強気に貴方さえ居てくれれば　なんて、囁くけれど。

その瞳がいつも揺れているのは常に不安だからなのだろう。

ぷっくりとした薄い紅を差したような唇を少し湿らせて。

薄く口を開けて、俺がそこに触れるのを待っている。

赤く熟れた唇を指先で少し撫でてなぞって。

そして、顔を近づける。

徐々にゆっくりと。

君との距離僅か五センチほどで俺も目を閉じて心の中で呟く。

ああ。

早く裁きが下ればいいのに

二人で居られるのならそれだけで幸せ。

それになんら嘘偽りはない。

二人あつてこそその関係。

二人あつてこそその幸福。

けれど、やはりこのご時世。

誰か一人がおかしいと言えば皆が皆流されてそんな風に責め立てる。

だから、誰からも許してもらえない関係が辛いのは変わりはない。

君は泣く。

人知れず。

俺に隠れて。

一人泣く。

周りに白い目を向けられるのが怖いのだと。

好きと呟いて繰り返して。

そして、君は壊れていく。

きつといつか俺を責める日が来るだろう。

好きなのにどうして苦しいのだろうと。

ああ。

ああ。

なんと、なんて。

罪深きことだろうか。

君を苦しめる原因が自分だなんて。

この想いが君を狂わせていく。

手を引いて抱きしめた。

その行為がいけなかった。

二人で居られるならそれだけで幸せ。

そうだよ。

そう。

幸せだったんだ。

君と居られて。

けれど、それは二人あってこそそのものなんだ。

ごめんね。

ごめん。

早く二人に裁きが下ればいいのにね。

なんて、祈りながら俺は細い君の首に手をかけた。

徐々に力をこめていき、君が息苦しさの僅かに顔をゆがめる。

僕は無表情でそれを眺める。

力をこめて力をこめて、きゅっと君の首を絞めてゆく。

君はそれを見つめながら幸せそうに微笑んだ。

俺もそれを認めて同じように微笑み返した。

ああ。

ああ。

なんと、なんて。

罪深きことだろうか。

愛する人をこの手にかけるだなんて。

息が苦しい。

上手く呼吸ができない。

君は笑う。

そつと持ち上げた腕に、手に力をこめて。

その先に俺の首を捉えて。

ゆっくりとゆっくりと力をこめていく。

そのたびに呼吸が苦しくなっていく。

気管が締め付けられているからだろう。

君は囁く。

キレイに笑って。

『貴方と居られて幸せでした。愛してます、死して尚も。永遠と誓います。』

俺も囁く。

『君と居られて幸せでした。この世の何よりも誰よりも一番に愛してます。死して尚の世であろうとも。幾度生まれ変わろうとも、永遠であると誓います。』

ああ。

ああ。

なんと、なんて。

罪深き愛だろうか。

愛する人をろくに幸せにできずに死なせてしまうなんて。

二人だけの世界では人は生きていけないのだ。

たとえ愛する者同士だとしても。

侮辱

臆病者だと笑っておくれ。

一人で膝を抱えていることしかできない能無しだと、陰口を叩いておくれ。

僕はその分、強くなってみせるから。

今のうちに、せいぜい罵っておいておくれ。

僕が立ち上がる前に。

さア、お願い。

盛大にお礼をしてあげるから。

盛大に辱めておくれ。

もうすぐしたら全て笑って受け止めて、倍にしてお返ししてあげるから。

楽しみにしておいで。

自信がないなら、もがいて泣いて縋って…それからどうしようもないと諦めたなら私に乞うがいい。

それまでは一人孤独の海に沈みなさい。

浸りなさい。

血の海に。

失望なさい。

己の無力加減に。

そうしたら、私がそこから救い出してあげてもいいわ。

ほら、優しく抱きしめてあげる。

首輪を買ってあげるわ。

きつくその身に食い込むような…痛みを与えられるようなのを、付けてあげる。

きつと可愛いわ。

よく似合うはずよ。

だって、この私が選んだ貴方ですもの。

この私が選んだものが、この私に選ばれた貴方に似合わないはずがないわ。

ふふふ。

最高よ。

ワン！とでも、ニヤン！とでも鳴いてみせなさい。

そして、靴をお舐め！

私をご主人様だと判らせてあげるわ。

まずは従順なそのカラダに。

それから強情なその自我に。

最高な私が最高な貴方を最高に辱めてあげるわ。

楽しみになさい。

「陵辱」

ああ。

それはとても快感ね。

貴方は女かしら？

「屈辱」

その歪んだ綺麗なお顔、最高だわ。

「汚辱」

綺麗だわ。

もっと嫌がりなさい。

「恥辱」

素敵ね。

「羞辱」

ああ。

とてもいい響きだわ。

「雪辱」

ああ。

それはとても不愉快なものね。

時は満ちた。

君に、この首輪を譲ってあげる。

それとも、新調する？

もったときつい刺々しいのに、する？

その首から血が滲み出るような……そんなのにしようか？

大丈夫。

きつと似合うよ。

とっても可愛いんだもの、君。

その綺麗なお顔によく似合うよ。

その屈辱に歪んだ表情は。

君の好きな言葉の一つだね。

今にして思うとなんて素敵な言葉なんだろうね。

どうして気付かなかったのかな？

でも、君のおかげで解ったよ。

さア、靴でも舐めてもらおうか？

今日のこのときのために頑張ったんだよ？僕。

一日中泥の中駆け回ってさ、歯も磨かないじじいに噛ませたガムをふんだりとかさ…最高に汚くしたんだ。

意外と難しいね？

一日で汚くするなんて。

君は一体昨日までどうやってあんなに汚くしてたんだい？

でも、まあ。

ここまでしたら君も舐める甲斐があるってもんだよね。

さア、ほらほら！

ニヤン！とでも、ワン！とでも、ご主人様とでも可愛く啼いてみせなよ。

そしたらさ、特別優しく…激しくたつぷり可愛がってあげるからさ。

いつもみたいに笑って見せてよ、ねえ？

強気じゃないと面白くないじゃない？

弱気でも好きだけどさ。

……反抗期ね……

これだからだめね。

犬はつくづく馬鹿だわ。

私の躰が成ってなかったのか、それとも足りなかったのか…。

ふん。

調子に乗っちゃってさ。

いいわ。

いいわよ。

今のうちだけは貴方の言う通りにしてあげるわ。

せいぜい可愛がりなさい。

やるなら徹底的にやりなさい。

最高に私を苛めてみせなさい。

そのうちにすぐ貴方にこの首輪を譲ってあげるから。

今のうちだけ楽しんでなさい。

仮初のご主人様気分を。

所詮、飼われる側だということをよくよくと解らせてあげるわ。

今に見てなさい。

すぐに溺れさせてあげるわ。

この私に。

この私の可愛がり方を癖にしてあげる。

今度は完璧に、調教してあげる。

ほら、もう貴方の番ね。

早かったでしょう？

いいわ。

いい。

素敵ね、その屈辱にまみれたお顔！

ああ…どんな首輪がいいかしら？

大丈夫。

今度は絶対取れないものにするわ。

オーダーメイドで作らせるから安心して？

ふふふ…。

やっぱり貴方にはこれがお似合いね。

貴方だからこそかしら？

とっても可愛くてよ。

さア、跪いて私の愛を乞いなさい！

もちろん、最高に可愛いお顔でね。

そしたら、最高にいたぶってあげるから。

楽しみになさい！

美しい死に方

どうせ死ぬならきれいに死にたい。

綺麗に。

奇麗に。

キレイに。

誰の目にも留まらずに一人死にたい。

あつという間に。

でも、どうせ人の死なんて汚いものよ。

ドラマやアニメや漫画や舞台のように、美意識のカケラもない。

無神経な死に方をするの。

居合わせた人に嫌悪感しか与えないでしょうよ。

人の死なんて、まだ私はこの目で見たことがないわ。

この肌で感じたことも、もちろん実体験なんてもってのほか…未
経験。

余りの悲しみで美化されるのかしら？

実際とは遠くかけ離れたそれで。

でも、美化なんて。

そんな偽物私には要らないわ。

どんな飾りも不要。

だって、私はきれいな死に方をしてみせるから。

けれど、そうね。

若い姿で、できれば死にたいわ。

そのほうがきっと美しいもの。

醜く歳をとった私よりかは。

だからね。

私、この世界ともうお別れしなくちゃならないの。

さよならの時間まであと少し。

じゅう。

きゅう。

はち。

「

.....
零
.....

「

一
。

二
。

三。

よ
ん。

五
。

ろ
く。

な
な。

なんて、ね…。

どうせ死ぬのなら、
できるならば大切な人たちに囲まれて死にた

いわ。

醜くても構わない。

人に嫌悪感とか、抱かせてしまったとしても。

私の死を悲しんでくれる人たちに囲まれて。

私が大好きな人たちに囲まれて死ねるなら。

多分きつと、それが私の最高の美意識。

私にとって最高の幸福。

きつと安らかに眠れるでしょうよ。

それって、人として美しい死に方じゃない？

それだけ自分を想ってくれてる人がいるってことが判るもの。

そして、世界は平和になった。

ある日、あるとき。

その決意のせいで。

あの子が幸せと言った日常を、俺が崩してしまった。

直接ではないけれど。

結果と言うか、間接的にそうなってしまった。

そして、俺からも奪われた。

唯一の安らぎの場所と、愛しい愛しいあの子を。

ああ。

ひとり泣いてはいないだろうか。

孤独に怯えていないだろうか。

いきなり引きずり出された戦場と言う名の舞台で。

俺とあの子は再会を果たす。

ああ。

ああ。

どうして、どうして。

お前がそんなところで怖い顔をして立っているんだ？

こんな争いがなくなるようにと願っていたお前が、どうして。

そんなところで生きている？

油断していた。

迂闊だった。

いつの間に俺の頭は平和ボケしてしまっていたんだ。

ありえない可能性ではなかったはずなのに。

どうして どうして どうして…。

今のお前の眼にはもう人を殺すことしか見えていない。

それでもお前はあとで自己嫌悪に浸るだろう。

たくさん命を奪うことしか考えられなくなった自分自身に嫌悪と憎悪を抱くだろう。

俺と同じ。

自分が作った死体の山から下界を見下ろして。

今日はどんな風に世界を壊してやろうか？なぞと、口元には笑みを浮かべながら。

ほくそ笑む。

凄惨な光景を頭の中に思い描きながら。

ああ。

ああ。

楽しみ。

と、そして、嘆くのだ。

自分がしたかったのはこんなことじゃないのに。

これでは本当にただの、悲しみを大きくするだけの殺戮者。

いや。

イヤ。

嫌。

否。

ちがうのに。

もっともっと上手くやれると思っていた。

誰も傷付けずに創れると思っていた。

誰もが幸せになれる世界。

きれいごとかもしれないけれど、みんなそのために戦ってきた。

命を張って。

やがて、気付くのだ。

それが愚かな行為だということを。

そんなやり方では憎しみしか生まれないと言つことを。

それでも回りだした歯車は留まらない。

止まらない。

もう自分の意志だけではどうにも成らないところまで来てしまっている。

愚か。

愚か。

愚か。

そう言って、笑う俺もその中の一人だ。

もう止まらない。

引き返せない。

引き返したくない。

今まで払ってきた犠牲を考えるとなおのこと。

何のために奪ってきたのか判らなくなる。

理由が欲しい。

それを正当化するための立派な言い訳が。

ああ。

醜いな。

いやな人間だ。

けれど、もう直せない。

そんなところはもう直せない。

直す必要はない。

俺が全てを成して見せよう。

他者が本当に望む世界を造ってやろう。

この俺が。

この俺自身で。

それが俺の言い訳になるのなら。

俺は終わりたい。

その罪にとらわれて生きていたくはないから。

肉体に同じ痛みを持って。

終わろう。

道連れにこの醜き戦いを背負って。

俺の存在はこの世界の中ではちっぽけな命の1つに過ぎない。

けれど、この戦いを知る個々の中ではそれほど小さくはない。

その上にさらにインパクトもつけてやろう。

俺は戦場であの子を見つけた。

愛しい愛しいあの子を。

俺だけしか継る者がいなかったあの子を、戦場で見つけた。

そのあの子に俺の死を与えてやろう。

これで元の優しいあの子に戻ってくれたのなら、きっと世界はいほうへ変わるだろう。

争いのない、平和の世界へと。

たとえそれがあの子に涙を与えても。

俺が居た過去と涙しか与えなくても。

おびただしい数を積んできた死体の山に、今日はとうとう俺自身
が沈み込んでしまった。

やあ、やあ。

いままでごめんよ。

けれど、今から俺も君たちの仲間入りだ。

やあ。

こんにちは。

ひさしぶり。

ごめんね。

俺の死体はあの子が積み上げた山のでっぺんにきつと一生在るだらう。

きつとあの子は一生苦しみ、悲しみ続けるだらうけど、それでも俺は幸せだ。

あの子が作った死体の山のでっぺんであの子を見守れるから。

それはきつと、この世界のどの場所よりもあの子に一番近い場所だから。

そして、少女は戦いをやめる。

戦いをやめ、明日を見る。

平和を探す。

手探りで一から。

何もない世界から幸せのある世界を創造すると決意する。

「これでもう、離れ離れにならないね」

貴方はずるいよ。

ずるい。

私にやさしさをくれなかった。

ぬくもりをくれなかった。

こんな冷たさ、ひどいよ。

全然あつたかかないよ、寒いよ。

痛いよ。

悲しいよ。

……一人ぼっちだよ……。

私に大好きな貴方の大嫌いな冷たい体だけを残していくんだなんて。

ひどいよ。

ひどい。

貴方のせいでとても私の腕が疲れるのよ。

いつもいつも、大好きな貴方だった死体を腕に抱きしめてるから。
じゃないともう夜も眠れないの。

でも、幸せなの。

悲しいはずなのにね。

泣きながら、私は人々の幸せを願うの。

みんなみんな早く幸せに成仏してね、と。

そして、少女は今日も可憐に舞う。

新しい平和の世界のためへと。

世界が平和になるようにと。

全ての争いの種を断ち切ってみせる。

この世から全ての。

そう…全ての種を。

だから、これは戦いじゃないわ。

平和を作るためのお掃除よ。

汚いものはゴミ箱へポイ！よ。

だからね、私の服はいつもすぐ赤色に染まってしまうの。

でもね、平和の世界はもうすぐ来るの。

みんなみんな戦わずに済むの。

みんなみんなお空でひとつになって笑えるよ。

だから、私頑張るね。

ほら、もうすぐ平和が来るわ。

戦いの種がない平和な世界が。

誰も居ない、戦いの音がない静かな平和な世界が。

もうすぐ出来上がる。

彼女の愛は彼を泣かす

君に会えなくて。

君に会いたくて。

けれど、会っても君はちっとも僕のことを見てくださいないよ。

だから、もう会えなくていいよ。

さよなら、ばいばい。

また明日だなんて嘯いて手を振り笑う僕。

君も同じようにそうすることが僕にとってどれほど残酷なことなのか、君は一生知る由もないのだろうね。

だから、僕もウソツキでいいんだ。

君が僕にとって残酷なら、僕は君にとってウソツキでいよう。

君という時間。

君と過ごした時間。

そのどれもがどこか虚しさしか煽らなかった。

可笑しいね。

君のこと、嫌いじゃないのにね。

楽しいはずなのにね。

君がいつも誰かのことばかり考えているから。

僕の入り込む隙なんて全然なかったんだ。

悲しい話さ。

けれど、だからこそ僕は君に普通に接していられたんだ。

怒りや嫉妬に駆られることのない、普通にいられた。

普通に笑っていられた。

嫉妬とか、全然しなかったんだ。

可笑しいね。

君のこと、嫌いじゃないのにね。

君が他の誰かの事ばかり考えていてくれるから、きっと僕は笑っていられたんだ。

初めから諦めて笑ってられたんだよ。

始まりも終わりもきつとなかったんだよ。

恋とすら呼べたかどうかも怪しいところさ。

けれど、それは確かに僕の中で芽生えていたんだ。

ほんの少しの、本当に短い間だったんだけどね。

完全なる僕の片想いさ。

けれど、それでも一応期待はしたんだ。

いくら初めから諦めてたと言っても、僕だって人間なんだ。

期待くらいするよ。

けれど、それが叶うだなんていう馬鹿な期待はしなかったんだ。

独占欲とかそんなものもなかった。

僕は特殊な恋をしていたんだろうね。

きっと、君を初めから諦めた状態でその上での恋をしていたんだ。
勝ち負けのない。

意味のない、悔しさのない逃げ腰だけの恋と呼んでいいものかと
悩むような。

そんな馬鹿なごっこを一人やっていたんだ。

僕はきつと本気にならなかったんだ。

君が全然僕のことなんか頭になかったから、それが判っていたか
ら。

だから、勝負をしなかったんだ。

僕は弱虫だったんだ。

ちゃんと現実に向き合おうとしなかった馬鹿。

君に断られるのが怖かった。

だから、だから。

僕は間違った方へとなけなしの勇気を使ってしまったんだ。

君に会えないよ。

君に会いたいよ。

けれど、君は僕を見ていないんだ。

それでも幸せそうに笑ってるんだ。

だから、ばいばいをしたい。

君に。

さよならを。

君が知らない間に、君とお別れをしたかった。

これで一応の決着がついたと思ったんだ。

馬鹿だな…僕。

声に出して言わなきゃ、君が他の誰かを想ってるなら、尚のこと。

声に出して言葉にしなきゃ、君には伝わらないのにな。

僕はそれさえも判らないほど馬鹿だったんだ。

そして、さよならをする。

けれど。

君はそれに気づいてしまった。

それを許してくれなかった。

「ねえ、ねえ…貴方、いつまで私に嘘つくつもりなの？」

「貴方はこのさよならを最後に私に二度と会わないつもりなんですよ？」

「それは少し身勝手すぎると思わないの？」

「貴方、最低ね」

「私のこと、馬鹿にしてるでしょ」

「いつまで悲劇の主人公気取るつもり？」

「かつこいい貴方のことずっと想ってて、考えてて、何が悪いの？」

「いいじゃない？」

「嬉しくないの？」

「どこまでヤキモチ焼きなの？」

「貴方、本当に馬鹿ね」

「テレビに映ってる貴方観ていて恍惚とすることの何が悪いのよ？」

「ごめん。けれど、現実の僕はそんなにかつこよくないし、それに君が惚れ惚れとしてるのはそのドラマで演じた役のことだろ…？」

「私の彼氏なら、もっと自意識過剰にならないさいよ！！このお

馬鹿！」

彼女は最近いつも僕と会っていても、ドラマばかりを観ている。

主役として僕が出ているドラマばかりを観ている。

ドラマの中での僕を見ている。

僕が演じた役の奴のことばかり考えてる。

それが少し…かなり氣にくわなかったりする。

これは嫉妬じゃない。

独占欲でもない。

ただの子供じみた我侭だ。

けれど、それを彼女に言っと。

「それは貴方が演じているからこそ私を虜にさせているのよ！」

「貴方じゃなかったら氣にも留めてないわ」

「彼氏ならそれくらい気付きなさいよ」

「そんなこと思えるくらいに自信持ちなさいよ」

「芸能人の貴方が一般人の私より不安になってどうするのよ!」

「そんなに不安ならもっと私を愛しなさいよ!」

「なんで作り物に貴方が負けるとか思うのよ」

「馬鹿じゃないの?」

「やっぱり貴方だからこそ観る価値があるってもんでしょーが!」

らしい。

嬉しいとは思っけれど。

やっぱりちょっと納得いかないよ。

ここに本物が居るんだから、それに少しくらい構ってくれたっていいじゃないか。

そんなドラマの作り物の僕ばかり見ないで。

ここにいる本物の僕も見よ。

本当の僕だけを見ていてほしいんだよ。

「てゆーかね、貴方。どれだけ乙女チックなのよ？」

ちよつとドラマに集中してたくらいで、変な物語作らないでよ。

このお馬鹿。

花「愛に素直な種族なのです。」

私に思いやりの水を与えてください。

そしたら、きっと私は貴方だけのために美しく可憐に咲いてみせますから。

貴方のために生きます。

貴方に私の全てを捧げましょう。

決して負担にはなりません。

だから、そしたら貴方は笑って私の最期を看取ってください。

ただお傍において頂ければそれでいいのです。

それが私の幸福へと繋がるでしょうから。

ただ貴方のその笑顔のために私は存在しているのですから。

だって、この生命は貴方が育ててくれたものですから。

貴方が見つけてくれた、私というの名の生命ですから。

だから、私は貴方の愛に忠実にお応えしてみせましょう。

咲いて咲いて

舞って舞って

散って散って

消えて消えて

そして、芽吹いて。

またお会い致しましょう。

私に愛を下さい。

一滴の優しい愛を。

そうしたら、もう何も望みませんから。

私に勇気を下さい。

一握り分だけの勇気を。

そうしたら、きつとどんな事だって出来てしまつてしょうから。

私に優しさを下さい。

ほんの少しの優しさを。

そうしたら、きつとどんな事にだって耐えられるでしょうから。

私に私にどうかどうか溢れんばかりのありとあらゆる想いを下さい。

悲しみも憐れみも優しさも喜びも楽しさも好意も嫌悪も怒りも憎悪すらも。

私に全て託してください。

そうしたら、きっと私はそれだけで幸せに咲けるでしょうから。

私に私に貴方という存在の証を刻み付けてください。

そうしたら、私は貴方のためだけの美しい花を咲かせられるでしょうから。

私をかたどるのは全て貴方の愛情なのです。

貴方が愛してくれた分だけ、私は奇麗になれるでしょう。

この身を以って、この一生を以ってして私は貴方の愛に従順に應えるでしょう。

貴方が愛してくれるから、私も貴方を愛せるのです。

愛してます、私を愛してくれる人。

貴方が私を見放さない限り、私は貴方を絶対に裏切ることなく、傍で貴方を癒すでしょう。

だから、一番目の私が消えた後も私のことを愛していて下さい。

そうしたら、きっと二番目の私が貴方の愛に報いるでしょう。

私の愛した私はまた貴方の愛に応えて美しくなるでしょう。

幸せそうに貴方に笑いかけるでしょう。

だから、私を愛して下さい。

貴方の愛がなければ私は生きられないのですから。

散り際に残るは種。

その繰り返しの中で私は生まれて、私は受け継がれていくのです。
私を愛してくれた貴方が悲しまないように次の生命の源を残して
いきましよう。

貴方が私のことを忘れないでいてくれたなら、そしたらきっと私
はまた貴方のために花を咲かせられるでしょう。

美しい花を貴方にあげます。

ご覧にいれてみせましよう。

愛しい貴方に。

だから、どうか笑ってくださいな。

私を愛してくれる優しい人よ。

刺傷

刺傷。

それは刺す事でできる傷。

とてもとても痛いもの。

けれど、私がここに生きているという証になること。

刺傷。

それは他者を心に宿したからできてしまったもの。

とてもとても苦しいもの。

けれど、私が独りじゃないという証になること。

刺傷。

それは愛おしさからできてしまったもの。

とてもとても悲しいもの。

けれど、私が誰かに愛されているという証になること。

刺傷。

さしきず。

サシキズ。

人が常に孤独と戦っているという証にあるもの

私は貴方を愛しています。

とてもとてもとてもとても。

愛おしく思っています。

お慕い申しております。

貴方に向けて幾度この気持ちを紡いでも、貴方に全て伝えきれない。

いくら言葉にして示そうにもそれだけでは足りない。

もつともつともつともつと。

貴方にこの想いが伝わればいいのに。

この思いが。

この想いが。

この重いが。

このおもいが。

このオモイが。

貴方を埋め尽くしてしまえばいいのに。

そしたら私だけをみていてくれるでしょう？

貴方は嫉妬に苦しまなくてすむでしょう？

そう言えば貴方は笑う。

無邪気に顔を歪めて、微笑む。

私のこの手に鎖を巻きつけながら。

とても重い鎖が手首を締め付けていく。

ああ。

この重さは貴方の私への狂気すぎる想いの重さだ。

私に対する執着と依存。

これがあるから貴方が苦しむ。

けれど、これがなければ貴方はもう生きていけない。

きつと私も生きていけない。

いくら言葉にしても足りなかった。

この想いは貴方に全部伝えきれない。

貴方への愛おしさなのに。

なんてもどかしいのだろうか。

言葉では足りない。

とてもとてもとてもとても。

切ない。

だから。

もつともつともつともつと。

貴方に伝わるように。

だから、許すの。

貴方が私にしたように。

私も許すの。

互いの想いを刻み付ける苦を一生背負うことを。

貴方が伝えようとしてくれる愛を私が受け止めることを。

言葉以外で示そうとしてくれてる貴方のこの恋情を。

私自身の身を張って受け入れることを。

痛みの伴う滑稽なほどのその想いを私にぶつけることを。

私がここに生きていて愛されているという証を。

私は笑って享受する。

私は貴方を愛しているのに。

貴方は私を愛してくれてるのに。

それなのにそれでもまだ信用できないなんて。

なんて憐れな私たち。

縛って傷付けあうことでしかお互いの愛を証明できない。

束縛しあってでしか信じることができない。

それがひどく痛く、苦しく、悲しく、愚かで滑稽なことだと知りながらにしてもなお。

それでも、ああ…。

私たちは互いを。

まだ。

きつと。

ずっと。

一生。

永遠に。

「 ……愛おしく思うのでしょ… 」

貴方も私も刺傷だらけ。

私たちの愛はまるで鋭くとがった刃のようだから。

それが互いが触れ合った際に互いを貫通させて。

それが愛の証になって、幸せと呼ぶに値する。

身勝手な傲慢

ごめんね。

ごめんね、ごめんなさい。

貴方をおいて逝くこと。

私独りで消えて逝くこと。

勝手に決めてしまったこと。

身勝手に振舞ってしまふこと。

ごめんね、ごめんね。

全部私独りで背負っていくこと。

貴方に痛みを与えたこと。

貴方に悲しみを与えること。

ごめんね、ごめんね。

許してね。

大好きだよ。

大好きだったよ。

私を好きだと言ってくれた人。

私が好きになった人。

泣かないで、泣かないで。

せめて微笑んで見送って。

最期の抱擁は思いつきりがいいよ。

最期の口づけは優しくがいいよ。

最期の言葉は大好きがいいよ。

サヨナラなんて辛気臭い言葉は貴方に必要ないよ。

サヨナラは全部私のものだから。

私が全部引き連れていくんだから。

だから、貴方はどうか笑っていて。

私にサヨナラを告げて泣かないで。

とても酷なことを言っているのはわかってるよ、ちゃんと。

だけど、きつと貴方が私の立場だとしたら、貴方もそう言い残すでしょう。

全部全部私が連れて行つてあげるから、貴方は私がいなくなった
悲しみだけに集中していて。

笑って笑って。

せめてこの瞼が閉じるその瞬間までは微笑んでいて。

そのあとはたくさん泣いてもいいから。

けれど、いつまでも泣かないでいてね。

私も悲しくなっちゃうから。

だから、しばらくしたらまた笑ってね。

私の大好きな貴方でいてね。

はじめはぎこちなくてもいいよ。

けれど、作り笑いはやめてね。

それは貴方の本当の笑顔をきつと奪ってしまつだろうから。

そしたら私、きっと寂しくなっちゃうよ。

だから、笑っていてね。

時々泣いてもいいから。

そのときは私を思い出さないでね。

貴方の心の傷口がまた開いて悲しみが漏れ出してしまつかもしれないから。

寂しくなったら好きな人に抱きしめてもらうといいよ。

それは私にとって、とてもとてもつらいことだけれど、私はもう貴方を抱きしめてあげられないから。

貴方を抱きしめることのできるあたたかい腕を持っていないから。

けれど、貴方が好きになつた人だもの。

きつと素敵な人なのでしょう。

だから、私は少しの嫉妬に駆られながらもきつとホッと息をつけるでしょう。

ごめんね、ごめんね。

許してね、どうか許してね。

私が私を全部取り払おうとしていること。

私が私として最後まで生きようとしなかったこと。

不意に足元がふらついて。

闇に目がくらんでしまったの。

貴方の傍で最後まで貴方を支えてあげられなくて悔しいよ。

大好きだよ。

大好きだったのに、私、私自身に負けたの。

どうか幸せになってね。

つらくても私のこと忘れないでいて欲しいよ。

他の人を好きになっても、私のことを二番目に愛していて欲しいよ。

もし子供ができたら三番目でもいいから忘れないでいてね。

私ってば未練がましいな。

私が勝手にしてしまったことなのにね。

貴方を無視して、貴方の前から姿を勝手に消しておいてなお貴方を束縛しようとするなんて。

かつこわるいや。

けれど、それくらい貴方のこと好きだったんだね、私。

ごめんね、ごめんね。

私、泣いちゃうよ。

貴方と一緒に居られないのがとても悲しくて寂しいの。

もう話すこともできなくなったのがとても悲しいの。

我侘な私でごめんね。

ごめんね、ごめんね。

きつと私、もう笑えないよ。

けど、貴方には笑って居て欲しいと傲慢にも思う私を許してね。

大好きだったよ、私を好きで居てくれた貴方のこと。

月夜恋慕

まるいまるい月が二つ在るよ。

遠くに見えるの。

滲んで二つに見えるよ。

貴方は一つなのに。

手を伸ばして請い願おうと決して届くことはない。

穢れを知らぬ純粹純真無垢なる月よ。

私は貴方に恋をした。

いつからだったかは定かでない。

けれど、多分それは一目惚れだった。

毎夜毎夜、貴方を探した。

たとえいくら遠くにいようと。

この眼で貴方の姿を捉えられるだけまだ幸せだと思つ。

けれど、何度も何度もあまりに遠すぎる距離に舌打ちした。

海が作れるほどの涙を流した。

貴方を恨んだこともあった。

私はこんなに愛しているのに。

私はこんなに求めているのに。

貴方は露知らぬ顔つきでいつも優しくただ微笑んでるだけ。

それはとてもとても白々しいと思った。

貴方は一生決して誰も愛しはしないのだろう。

幸せという名の牢獄

「本当に、君自身を捨ててしまふのかい？」

「ええ。でないと、あの人の笑顔は見れませんから」

「…そうか。では、仕方ないね」

「はい」

「君は、自身のすべてを手放すことを了承するんだね」

「すべてを手放すことを了承…？」

「違うのかい？」

「私は、命は捨てても手放すものなんて何もありませんよ」

「それはどういうことなんだ？」

「私は、あの人の笑顔さえあればもういいのです」

「それは、君のすべてを手放すとは言わないのかい？」

「はい」

「…君は本当に、訳のわからない子だね。君の手元には何も残らないだろう？」

「私の手元に残るも何も…初めから何もないですから」

「…君は頭の堅い子だね。そんな考え方ではさぞ疲れただろう」

「何とも言えませんよ」

「君は初めから空っぽだった。何も手放すものはない。では、これからその人の笑顔を手に入れに行くのかい？」

「厳密に言えば少し語弊がありますがね。私を取り戻す原因になってもそれは私の手には入らない」

「…君さあ、そろそろ鳥かごから出てみてはどうだい？もう錠はじょう外されてる。出口は目の前に開けてる」

「あそこには、あの人の笑顔はないのです…」

「君の居場所だろう？」

「今となつてはもう判りません。きつと兄も私に愛想を尽かせて見放していることでしょう」

「では、君の言うあの人は？」

「…あの人は、私のことなんてきつともう憶えていませんよ。余り人前に姿を出さなかった私ですから物珍しさで遊ばれたのでしょう。所詮、雲の上の手の届かぬ存在の方だったってことです」

「…君は嘘つきな子だね。そんなに好きなら傲慢を押し通してはみないのかい？」

「私はそこまで我が強くはないんですよ、こう見えても」

「けれど、君がしようとしてることは本当に君の言うあの人のためになることなのかい？」

「なくてもならなくても。もうここまで来てしまいましたから引き返すことなんて、できないですよ。…ね？」

「つくづく悲しい子だね、君は。自分には何もないと言い、あの人の笑顔だけがあればもういいんですだと言つて。それは君には入らない。…君は自分が消えることによってあの人に笑顔が戻ると思つてここに来てるのだろう？笑顔つて、そんなに大切なものなのかい？一生傍にいられることよりもずっと？」

「…多分、そうだったんでしょうねえ…」

「じゃあ、残念だったね。君が命を投げうつてるのに笑つてたら、その人はきつと、」

「狂つてるんでしょうねえ…」

鍵をかけて心を閉ざしてしまいなさい。

きつと私は楽に生きられるでしょうから。

嫌なことからは目を背けてしまいなさい。

犯した罪なんて忘れてしまいなさい。

そして、誰よりも何よりも愛しいと思った人のことも忘れてしま
いなさい。

その感情も捨ててしまいなさい。

その人の笑顔のために。

私が私として生きていくために。

苦しくてたまらなかった。

息もままならないくらいに。

決して貴方しか見えていなかったわけじゃなかったのに。

いつの間にか気付けば貴方の腕の中、閉じ込められて外の世界を
見ていた。

好きだと囁いて。

囁き返されるたびに、囁き返すたびに罪の深さを思い知る。

優越感に浸れるから私はこの腕の中に居るのだろうか。

罪を犯した。

貴方となら犯してもいいと思った。

たとえ周りに軽蔑されて呆れられようとも。

鍵をかけて、このまま日の光を見ることができなくなればいい。

騙していて。

すべてが幻であつたのだと。

ただの戯れだったのだと。

嘘をついてこのまま死ねたらいい。

嘘をつかれてこのまま殺されたらいい。

愛を紡ぐ唇を塞いで。

息もできなくなるくらい。

言葉を失くして声を失くして。

愛しいとさえ告げさせずに、ベッドに寝かしつけてくれればいい。

嘘をついて。

二人だけの嘘を。

耐えられなくなったなら心を閉ざしてしまいなさい。

貴方さえものぞくことのできない扉を作ってしまいましょう。

貴方さえも開けることのできない鍵をかけて。

眠ってしまいなさい。

深く深く。

息も凍るくらいに。

このまま目が覚めなければ。

貴方はきっと解放されるでしょう。

そしたら、私は楽に生きられる。

貴方の温もりに苦しまなくてすむ。

苛まれる牢獄に貴方だけを取り残して私は死んでしまいそう。

愛して。

愛して。

愛してます。

愛してました。

貴方の笑顔、眩しかった。

嘘をついて。

騙されないで。

嘘つきって嘆いていいのは私だけです。

貴方は素知らぬ顔で軽蔑の目をむけてればいい。

このまま会えないなら。

貴方の笑顔を求めて旅にでてしまおうか。

ふいに、意識が現実へと引き戻されて。

私は再び目を覚ましてしまった。

「…なにを、泣いているのですか？ 貴方は」

みつともない。

みつともない。

みつともないですよ、ばか。

「私を呼び戻したひどい御方は、貴方ですか？ ねえ…」

あのまま死んでしまえたら、私はきつと自由になれたのに。

雑音が耳に届いてしまつて。

「貴方の声が聞こえた気がして、」

私の名前が呼ばれた気がして。

「連れ戻されちゃいましたね、貴方に」

どうやら、貴方を牢獄にひとりぼっちにして去ろうとした私を、
貴方は見逃してくれなかったようだ。

「なんてヒドイ人」

なんてひどいお顔。

まるで。

「私がいじめたみたいじゃないですか」

そう、少し意地悪をした。

「まあ…なんてダメな人」

私が居ないと生きられないなんて。

「ほら、笑ってくださいな。ね？」

貴方の笑顔を求めて私は旅にでようとしたというのに。

貴方は簡単に笑うものだから。

私はすぐに見つけてしまつて。

旅立つ理由がなくなっちゃいましたよ。

「私、貴方の笑顔が大好きですよ」

たとえ牢獄であろうともそこに貴方の笑顔があるのなら。

貴方が笑いかけてくれるのなら。

私はそこで生きましょう。

目が覚めた瞬間、視界に映つた貴方の姿に。

生き地獄を味わえと言われたようでしたけれども。

「貴方が愛してくれるのならもう地獄だって構いませんよ」

私の愛しい愛しい共犯者さん。

一緒に罪を償いましょうか。

そして、堅く錠を落とした扉は開けた。

愛とはなんぞと問いましょう

貴方に私の心を触らせて、それで私が死んだら貴方のせい。

だから、私に触れてこないで。

気持ち悪いだけ。

不愉快なだけ。

貴方が中途半端に私を愛するから私はそれに応えることさえできやしない。

貴方が何に惹かれて私を縛り付けるのかわからない。

理由も告げずに押し付けられたって、それはただの迷惑でしかない。

理由を述べられてもきつと私は一生理解しないのでしょうけど。

愛して欲しいなら私が私じゃなくなるまで待っていなさい。

もつとも、私が死んでもそんな日は来ないでしょうけど。

24時間失恋。

泣いて縋って引き止めたってダメ。

失恋バイバイ。

失恋万歳。

失恋最高。

あら、失礼さよなら。

好きだって笑ってみせてもだめ。

好きだと告げていいなんて言っていないわ。

さよならバイバイ。

その泣き顔くらいなら最高だと思わなくもないわ。

少しも情がわかないけども。

好きだと思えない。

いつまでも傍に居たって。

貴方はいつまでもひとりぼっちのまま。

寂しい？

つらい？

悲しい？

私は貴方を愛さない。

愛せない。

24時間永遠に。

声をだして泣いてもだめ。

愛してなんかやらないわ。

私をきつく抱きしめてもだめ。

顔を痛みに歪めるだけで終わるわ。

無理に抱いたってだめ。

無効化無効化。

私の無関心をひどくするばかりよ。

私の神経を逆撫でするばかりよ。

病んだ外の景色。

無色透明の窓ガラス。

グラスを割って、破片でこの喉を引き裂いて。

愛を紡ぐ声なんて初めからありはしなかった。

貴方が欲しいと望んだものを私は与えようとしなかった。

愛して欲しいなんて、要求した覚えはなくてよ？

愛なんて要らない。

そんなものなくても人の身体は動くのだから。

愛を紡ぐ唇は嘘つきばかり。

それで私を騙して墮落させるつもりなのでしょう？

私はあなたの様にはなりたくない。

病んだ瞳に映りこむ貴方の姿は滑稽すぎた。

憐れみを誘うような情けなさで私に縋り付いて、助けを求める。

そうやって私を羽交い絞めにして身の自由を奪ったとしても。

私は永遠に貴方のものにはならない。

束縛してこの虚ろな身体を抱いてればいいわ。

いつかは腐ってしまうもの。

貴方が愛した私だって。

所詮、たかが百年ばかりしか生きられない人間なのだから。

私の身体が腐るほどの時が過ぎたとしても、きっと私は貴方を愛さない。

ずっと永遠に。

そう、24時間どれだけ一緒に居たって。

貴方はひとりぼっちのまま。

貴方の求めた私は貴方を振り返らない。

痛みを誘うような愛ばかり注がれても私が傷むだけ。

滑稽すぎて笑いさえもう零れやしない。

なんて可哀想な人なのでしょう。

私に愛されたくて愛されたくて堪らないのに。

そんな私を愛して愛して愛しすぎて今にも狂ってしまいそんな貴方なのに。

そんな私にまったく愛されないなんて。

なんてなんて悲しい人なのかしら。

24時間さよならバイバイ。

私のせいで失恋だらけな貴方に。

貴方のせいで傷だらけな私から。

24時間失恋バイバイ。

「もう終わりにしましょう」

そうして私は初めて私の笑顔を貴方に与えて。

貴方をきつく笑顔で突き放したの。

さよならバイバイ。

24時間失恋よ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5018f/>

それは誰かの足跡

2010年10月21日20時29分発行